

るに當り羅馬帝國の政權は全く伊太利以西を支配すること能はず、教會の教權のみは蠻族に號令して勢威赫々として隆盛むなりければ茲に及びて羅馬教會の大勢力の基礎は定まりぬ。故に羅馬法皇の唱首はレオ一世と爲す可しと雖も實權の基礎を定めしは法皇グレゴリイ一世紀元六百年の頃と云ふ可し。後にピ、ンの子シャールマンが法皇を助けてロンバルトの蠻族を追ひ伊太利を法皇の權下に附し、内には法皇が教權を以て人心を撫育し外には大王が兵權を以て版圖を擴張し、シャールマンの王業の成るとも、王に金冠を戴かしめたるレオ三世が宗教界の事業も亦功を奏すると大なりき。(八百年以後當時は未だ東帝國も社稷を保ち、小亞細亞、コンスタンチノール地方、希臘、伊太利の南部を支配せり、然れど回教は七世紀の頃より版圖を擴張し波斯、アラビヤ、スリヤ、エジプト、北亞弗利加、西班牙を蠶食し日に月に其勢威盛むになりければ、帝國は殆んど累卵の危きが如く、首府コンスタンチノールも圍まるゝと二回、又再振の國勢なし。之に反して西方のシャールマンの帝國は今日の佛、獨、蘭、伊を領し勢威四海を併吞せむとす、天主教はこの活力ある帝國の進歩と共に運動せしにぞ、其教權の布き及ぶ所決して西方の監督長等の企及す可きに非ず。シャールマン卒去し其版圖群雄割據の姿となり、北狄屢々侵入し、中世暗黒の時代となりたれども、東帝國の活氣を失なへるが如きに非ず、鬱勃の氣運は

宗教をも益々盛むならしめ、弊害百出殆んど救ふ可からざる時もありしが、グレゴリー七世等が力を盡して教會を矯正し、蠻民を教化して屈せざりしかば、東邦の教會(希臘教)と分離するに至り千〇五十四年教權傾に大勢力を振起し來り、グレゴリー七世は教職に在る者の惡徳を洗滌し、教會を政權より獨立せしめ、監督をして各國政府の治下より離れしめたり。其後にかの十字軍の役あり、又法皇にはインノセント三世の如き人ありて、過大なる教權を以て諸國王をも制し、教會、邦家ともに惡徳より救はれしこと多かりき、もとより此間凡二百年は法皇に專制の事なきに非ず、人民には迷信の事多かりしと雖も、天主教の全盛は當時に在りしあり。(我が鎌倉の代なり)次の時代には天主教の隆盛頂點に達し、十四世紀、又政治界の變遷も既に近世の萌芽をあらはし、教會には不信不徳の法皇を多く出し、紛議屢次起り、政界にはコンスタンチノールは終に回教徒の手に落ちて東帝國は亡び、獨逸、英吉利等は近世の開化に進まむとするの傾向あり、羅甸の文學衰へ來り希臘の古學復興し、各國の國語も發達し、永く法皇の專權の下に在ることを甘んぜず、革新的の學者イラスマス、ウイクトフ、殉教者ホッス、サボナルラ等の輩出するに至りぬ。天主教は此より統一の權を失しなひ、千五百卅年の前後より新教の勢炎熾むになり來り、終に希臘教、天主教、新教とは鼎立するに至りぬ。願れば使徒、師父の時代より羅馬帝の大迫害も終り、三

百年間)コンスタンチン帝が信徒となりしまでは唯一の基督教のみ(神學上の議論は問はず)帝が都を東に移すに至り延暦年間なり桓武の朝基督教も勢ひ兩派に分るゝの傾向あり以後凡七百年間は未だ分離せしに非ずされど西都羅馬の監督長と東都コンスタンチノーブルの監督長は教權の上に於て爭論たゆることなし十一世紀に至りて希臘教は分離したり。其後凡五百年間は天主教日進の勢ありしが革新の聲の發るともに終に前記の如くに三大派とはなりしなり。

新教の興りしより後三百年間は其初には天主教が新教を壓し新教は天主教に抗抵し史上慘劇の談のみあり獨逸瑞士は論ずるを待たず佛都パリにてバルトロマイ祝日の屠殺は新教信徒を一夜に二千人を屠り城外にては二萬人餘を殺せりと傳ふ。蘭國英國蘇國に於ても慘狀のみ多し特に異端吟味所と稱するものあり伊太利西班牙に於ては夥多の新教信徒を殺せり。然れども天主教も亦た矯正する所あり千五百四十五年より全六十年に至りしツレントの會議に於て十二箇條の信仰箇條を決定し、ロユラは千五百三十四年に耶蘇會社と稱する會を設け内には法皇の使節になりて教會の爲に盡し外にはパレスチナの參詣人を保護し病人を看護し回教徒に傳道するを目的と爲せり。足利の末に我が國に來りし有名な傳教使ザウエーもロユラと共に會社を設立せし一人なり。

故にこの會社は外國傳道の嚆矢となり慈善事業の協會の唱首となり天主教會の矯正を計りしものなりき。故に教會も信仰を復興し愛心を振起し決して十四十五世紀の頃の法皇に非ず。監督に非ず、信者にあらざりき爲に新教の蔓延を阻め十六世紀の終には、概畧教勢の定りたり。北歐の諾威、瑞典、噠馬は全く新教となり獨逸の西北部、瑞士の五分の三、蘭國蘇國英國の大部分は新教となりたれども佛國、以國、西國、葡國は天主教を奉じ、澳國も亦た天主教を奉せり。嗚呼宗教の離合は單に教理上の問題のみに非ず、外部の勢力に大なる關係あることを知る可し。希臘教の分れたるは東西に都の分れしより舊新の區別を生じ、監督長は東西に在りて容易に屈せず、國語を異にし風俗慣習性情の異なるあり。新教の分れたるも亦た羅甸人種と獨逸人種の相違あれば國語慣習性情を異にせり、彼は深沈剛毅の民なり、地は西北に偏せし所なり、我は快活勇壯の人なり、地は東南に在りて多くは地中海の晴嵐を呼吸す、甲は嚴肅を好み乙は美艶を愛す、元より人為の防遏は非常に力ありしと雖も、以上の勢力感化は革新の大要素なりしなり。況んや獨逸人種の諸國の十九世紀の潮流に乗せむと爲すの、新國なり、羅甸人種の諸國は既に全盛の極に達し中古の善美を退きて守らむと爲すの運に屬したる舊國なり、宗教の離合偶然には非ず。革新は新教の分れしに止まらず、天主教も内部を新になし外部に進むで傳道、慈善に力を盡せ

り。耶蘇會社は弊害を生じ今は全く力なし、然れど天主教も近世は諸國に傳はり特に北米合衆國には殖民と、もに増加し、南米諸國は西葡の人種より建國せし所ゆゑ尤も盛むなり。十九世紀に至りては法皇の權威は昔より反て重きに傾きたれど、俗界の政權とは愈々離れ來り、別けて以太利の建國以來は羅馬をも支配する權なく、全く教界のみの權を保つことゝはなりぬ。特に近時は、カルヂナルにもマンニング、或はニウマンの如き人ありて、決して衰退せしものに非ず。

其教書は論ずるを待たず聖書なり。然れど聖書のみならず聖傳と稱するものあり、舊新約全書の外に昔時よりの遺傳説を集めしものなり。又聖書の解釋も聖教會の一定せし註解に従はざるを得ず、近世は聖書を一般の信者が讀むことを禁ずることなしと雖も敢て勸むる方に非ず、拔萃せし要文を以て一般の信者の爲に備ふるなり。故に宗教會議の議決せし説、法皇の訓令は必ず守らざるを得ず、法皇は神より誤謬なく道を教ふる權を委任せられたる者と信するあり。且羅句語を用ふるなり。異説僻見を防ぐには可なり、周ねく知らしむるには適せざる方法なりと雖も、神聖を保つには無上の法と云ふ可し。教義は左の數條を讀みて知る可し。

(一)ニカヤの信仰箇條を信する事(紀元三百二十五年に開きし會議の議決なり)

(二)教會の遺傳及規則を受くる事

(三)聖教會の註解に従ひて聖書を信奉する事

(四)七大禮を守る可き事

(五)洗禮(ろ)堅信禮(は)聖體(に)懺戒(は)末期の禮(へ)接手禮(と)婚禮

(六)義と爲さるゝにはツレントの會議に従ひ其決議に従ふ可き事

(七)聖體を祝する時には教職は信者に代りて犠牲を献ぐると信す可き事且聖體の麴麩は肉となり葡萄酒は血に化するものと信す可き事

(八)信者は葡萄酒を受けざるも麴麩のみを以て十分に聖體を祝すると信する事

(九)鍊獄あることを信じ、其鍊獄に在る者は信者の祈に因つて苦患を免かるゝ事、又聖者を敬す可き事、其遺物を尊む可き事

(十)基督の聖像及摩利亞の像を貴ぶ可き事、又教會は信者に罪を赦す權ある事

(十一)羅馬の監督は使徒ペテロの後嗣なれば基督の代理者と信じて従ふ可き事

(十二)此の聖信仰箇條を必ず遵守す可き事

以上はツレントの會議にて決せし信仰箇條なり。又千八百五十四年の法令には基督の

母マリヤは無罪出生にて始祖亞當の罪に干はらざる者と定められたり。前のツレントの會議の決斷を見れば、天主教の如何なるかは窺ひ知ることを得べし。雖も少しく解き明さむには新教の祖と仰がれしルーテルは神の救を受くるは専ら信仰に在りと信じ、神恩を重むして己の力に由らずと説けり。天主教にては唯だ神より救を受くるのみならず、信仰にのみ由る可からず、天主教々會の禮典、教職の祈願、信者に代りて犠牲を献げ或は祈禱を爲し、罪を赦す等の事なり。化體の功、晚餐の麵包、葡萄酒は基督の血肉に化するが故に之を献ぐる者は即ち信者に代りて犠牲を神に献ぐるなり。に由りて救を受く可きものと教ふるなり。又洗禮に由りて既往の罪は潔めらるゝと雖も、其後の罪過は己の功德と教會の禮典を守ることを、教職の祈願等に由りて贖れ且つ救を全ふするものなりと爲す。又マリヤに就きても前に記載せし如く無罪出生とまで定めし事は全く基督を尊むよりして直接に近づくことを憚り祈願する者を求むるより起りしあり、故に聖母のみならず、古聖人をも尊み其遺物さへも力ありと信じ、聖母に祈願の助力を請ふに至れり。斯く凡俗と基督の間の距たり來りしは職として天主教が階級制度的に發達せしが故なる可し、故に宗教家と稱する者は其身教職に就き修道院に入り殆んど佛教の僧侶の如き者となり、獨身にして苦行を爲さざれば殆んど完全なる救は得られ難きことゝな

りし事ありき。一言を以て評すれば之に由らしめて迷惑に陥らざることを肝要と爲し、嚴肅なる秩序を以て教會を整理し、知らしめて自由に發達することは重んぜざりしなり、其教政を見るときは思半に至らむ。又煉獄説ありて不完全の信者の未來大審判の前に火を以て罪過を贖ひて、天國に入ることを得べし。又は謝罪金を献ぐる時は煉獄の苦を脱る可し。又は死者の爲に聖体を祝し、教職が麵包、葡萄酒を神前に献ぐるなり。て死後の救の爲に祈りて應驗ありと云ふに至りしなり。此等の事が基督教の正當の教義なるや否やは天主教と新教の分るゝ所の大事なれば茲には論せずと雖も、外形の諸禮典等は、教理は氷炭の差ありと雖も、頗る佛教寺院に類似したるやに見ゆるなり。金碧を莊嚴したる殿堂に基督の像を安置し、又は金冠瓔珞を以て飾りたる聖母マリヤの像あり、諸聖人の像あり、香花の芬芳たる燈光の燦爛たる、祭服には錦繡を以て飾りたる位階の差あり、白衣の人あり、黒装の女あり、聖旗あり、讀經、奏樂あり、殿堂の門楣に立像あり、加ふるに聖體と稱する麵包或は葡萄酒あり、涙にくれて罪の赦をば教職に懺悔する信者あり、指を以て十字架の圖を胸に畫くことあり。天使、惡魔、天國、地獄、特には煉獄等あり、皮相を以て一見すれば殆んど寺院に詣るの感あり、宜なる哉、天主教の事を叙するに當り人の多く寺院、僧侶等の文字を用ふること。

其、教、政は整然たる監督政體なり、教職の名は大略左の如し。

(一)法皇(バ―バ) (二)大監督 (三)監督 (四)大執事 (五)牧師 (六)執事

この他に讀經者等の諸職あれど教職に非ず、又大監督の上に「カルジナル」と稱する位階あり、この位階に在る者より法皇は選舉せらるゝなり。又教職に在る者は必ず獨身なり。又修道院ありて修道者を置き、院長の令に従ひて禮拜、讀經、寫經、或は工業農耕等を爲し神にのみ仕へて清く世を送る可き所あり、往古は高山、幽谷に住せし者もあり、山僧道士に似たる人もありき。惣て天主教の會堂又は修道院は其規模も大にして、附屬する田野財産も多きものあれば、自から其組織も寺院に似て、時辰を報する爲に鐘を叩く者あり、門前の乞食に施を爲す者あり、己も乞食する者あり、院内の掃除を爲す者あり、音樂唱歌の師たる者あり、或時代には教理には味くとも教會の儀式にのみ熟すれば事足りりと爲しゝなり。かのルーテルも修道者となり賤役を執りしことあり。又教會の費用、教職の給料等も教區より支出して恰も公立の學校教師に對するが如く、或は御朱印地のある寺院に似たるものゝ如し。政府に對する關係も今日の教正、若くは寺院の住職が社寺局に對するよりは、徳川氏の代の附正と寺社奉行に似たる方にして時としては幕閣の老中と教政を議したるに近し、法皇に至りては其教權の無双なると和漢に例なし、時代によりては帝王の尊

貴なるも罪を法皇の宮殿の階下に立ちて待たざるを得ざる事ありき。今日に於ても羅馬法皇とし云へば歐洲列國の間に一敵國の觀を爲す者あり、其宮殿を「ワチカン宮」と稱し、莊麗天下に比類なし、現今は教會に屬する國郡はなしと雖も其歲入の豊なるは尋常の王國の遠く及ぶ所に非すと云ふ。祭日は天主教、希臘教の兩教會に甚敷相違なし、新教の監督教會も同一なり、重なるを擧ぐれば

日曜日 二世紀の頃より基督の甦りし日を祝し、常の業を休みしと傳ふ

金曜日 基督の苦難を思ふが爲に斷食す

更生日 基督の復活を祝す、四月十四日なり

降誕祭日 十二月廿五日なり、「クリスマス」と云へば今は萬國の人の知る所なり

(他の祝日ハ略す)

以上の祝日は天主教のみに非ず、然れども祝日に對する感情は教派に由りて輕重ありと雖も、日曜と降誕祭日は殆んど一般のものなり。

又宗教會議と云ふことありて昔より教理上の問題を決せしと多し、グレゴリー一世の前にも有名の大會あり、以後も屢々會議を開きて重要な事を議したり。重なるを擧れば

- (一)ニカヤの大會議
- (二)エペソの大會議
- (三)第七大會議
- (四)ツレントの大會議
- (五)千八百七十年の大會議

ニカヤ以後二十回ありき。

又法皇の數はグレゴリー第一世より紀元五百九十年即位レオ十三世即位は千八百七十八年まで凡百九十代なり(撰擧されたれども即位式の前に永眠し或は事故ありて位より追はれしは除く)ルーテルが革新を唱へし頃はレオ十世の代なりき。

教職は前にも記載せし如く中世の傾向頗る僧侶に似たる所あり天主教も希臘教も同一の傾向ありき。今日も未だ外形より觀る時は新教の牧師とは其趣を異にし前なるは僧に似たる所あり後なるは講師に似たるものなり。然しながら基督教は出世間法の教に非ざるが故に別に僧伽と稱するが如き社會は設けず到底社會的の教なれば俗界を離るゝものには非ず、一時の現象は兎も角も天主教も亦た高踏的の憂ある宗教にはあらず。

### 第八章 希臘教

基督教の東方に分れたるものなり。換言すれば東羅馬帝國の首府コンスタンチノーブルに在りし監督長の下に屬したる一派が希臘教となりしなり。希臘教の名を負ひしは、こ

の教派は始より東方に在りて希臘語を用ひ希臘の學藝を重んじ希臘人が教會中に力ありたればなり天主教と全く分れたるは千〇五十四年七月十六日ありき。羅馬法皇レオ九世よりコンスタンチノーブルの監督長に書を送りて羅馬教會に屬せざる教會を追放し監督長も亦た答ふるに羅馬の教會に屬する者を絶てり。(時は我が後冷泉天皇の御世天喜年間なり)當時より希臘教は今日に至るまで全教會を支配する法皇の如き者なく、コンスタンチノーブル(土耳其の首府アンテオケ)小亞細亞に在り(エルサレム、パレスチナの首府アレキサンデリア埃及の市府)の四ヶ所に監督長一人づゝを置けり。されど今日は四府皆な回々教の土耳其領とありたれば昔日の勢威はなしと雖も土耳其帝國の中にて回教を奉せざる人民は皆な希臘教を奉ず故に小亞細亞、ルーマニア、ブルガリア、セルウィア、希臘、パレスチナ、亞刺比亞に亘りて一方に雄視する基督教の一派なり。特に魯西亞帝國は擧げて該教を奉するが故に、西方に失しなひたる勢力はやゝ償ひ得たるものと云ふ可し。近世は左の六ヶ所にシノド(聖會長の議會)の意或は總監督を置けり。

(一)サン、ペテルスブルグ 總監督一人シノドを置く

(二)コンスタンチノーブル

(三)アレキサンドリヤ並カイロ 同

(四) エルサレム

同

(五) グラスコ

同

(六) アゼンス

「シノド」ヲ置ク

以上の諸地は元より同一の教派なれば親密なるは論ずるをまたすと雖も前にも述べし如く希臘教には法皇の如き者はなし世人該教を以て魯國のみの宗派と見る可からず。茲に魯國の「シノド」の組織をわく教政の一斑を窺がふに足る可し希臘も近世の建國以後「シノド」を設けしきり「シノド」は

一 總監督(ペトリアルク)を置くとなし。

一 會員は七人より少からず十二人より多からず。

一 會員は兩首府(ペテロスブルグ並モスコ)キエフ府の監督長を以て常置員となし、外に陸海軍附の牧師長一人、帝室附の牧師長一人、地方より選拔せられたる監督、政府より大検事を出だす(大検事の内閣大臣)と同一の權あり、「シノド」に議案を呈出するは大検事の權内に在り、「オーブル、プロクロール」と稱す)

「シノド」は政務局とも譯す可し、監督長の教權と魯國政府の政權とは大検事ありて平均協和を得さしむるなりと云ふ。會議の首座はペテロスブルクの監督長を以て充つ。

希臘教の教政は左の諸員を置きて收するなり。曰く

一 總監督(ペトリアルク)總主教と譯す

一 首府監督長(ミトロポリト)府主教と譯す

一 大監督(アルキエписコフ)大司教と譯す

一 監督(エписコフ)司教と譯す

一 牧師(プリスウイテル)司祭と譯す

一 執事(デアコノ)補祭と譯す

外に讀經者、或は修道者は神品と稱する教職には入らず。

斯くの如き教政なりと雖も、希臘教は畢竟天主教より手を分ちて東西に立ちしもの、如く、新教が天主教、希臘教に對するが如きものに非ず。史を按ずるに東西分離の重なる原因は

第一 神學上に於て東西の神學者の取る所を異にせり。例せば東方にては基督の性につき位につきて研究すると多しと雖も、西方にては寧ろ人間の自由とか亞當アダムの罪の結果とか云へるが如き問題を考究せり。

第二 用語の相違あり、東方は希臘語を用ひ、西方にては羅甸語を用ひ、互に其用語其學

術に倣り他を見ることなし。

第三 禮式儀典の些々たる相違も當時の信徒には痛く感情を傷りしあり。例せば聖晩餐禮の麵包も東方にては尋常の品を用ひ、西方にては酵もちを入れざる麴包を用ひしが如し。

第四 教理上に於ては西方にて信ずる所は聖靈は父と子より出づるなり。然るに東方にては聖靈ハ父よりのみ出づると信じたり、この聖靈の問題は當時宗教大會議にて決議したる教理上の大事なりき。

第五 東方の諸教會は羅馬法皇は東方より見れば羅馬の監督長一人のみ全教會を支配する權ありと認めず。

以上の數點より終に東西に分れたりとも雖も、詳細に分争の源因を知らむと欲せむには、當時の羅馬史上より觀察を下さざれば正鵠は得がたかる可し。元より教理、教政禮式等につき互に執る所あるハ必然の事なれど、分離の大源因を觀る可きは希臘羅馬の兩國民が性情慣習の異なるより起りしなり。

教書は元より聖書のみなれど、聖傳も聖書に矛盾せざる點は採るあり。教義も天主教と甚しき相違はなし、晩餐禮の麵包と葡萄酒につきても化體説を取る。基督の像につきて

は全然天主教と反して畫像を重んじ會堂に懸くるのみならず、家毎にも懸くるなり、されど畫像は之に由りて基督を念ふの便になす物ゆゑ畫像を拜するには非すと云ふ、其弊は史上に發見すると多しと雖も全く本意は記憶追念の爲に供ふるなりとす。其他童貞マリヤに對する事或は聖人の建物等を重むること天主教と同じ。マリヤの無罪出生は取らず、鍊獄説は全く取らず。

教會の大禮なる洗禮、晩餐、堅信禮、婚禮、按手禮、告悔、聖傳の七ツあり、其儀式は天主教と少しく異なる所あり。便使ヤコブの「リトルギヤ」と、金口ヨハネの傳ふる所に由ると云ふ。祭服、儀式、會堂の裝飾等も天主教と異なる所あり。特に會堂の建築法は希臘風を重むじ、屋蓋を圓形に造りたり、其起源は希臘の法廷或は議場の爲に設けし家の構造法なりとぞ。

東京駿河臺の會堂を觀て知る可し。外國傳道は我が日本へ魯國より傳道使を派遣せしを以て初と爲す。天主教或は新教の如く外國傳道には未だ力を盡したるとなし。

抑々希臘教は天主教と東西に分れしより、回教の亂により其都府コンスタンチノープルは西方羅馬が日に月に隆盛に赴きしが如くならず、其餘喘を長く保しと雖も、歐洲大陸の諸國が勃興すると共に其法運を盛むならしめたる天主教には數歩を譲ると多し。北阿



弗利加、パレスチナ、小亞細亞は盡く回教徒の手に陥りしなり、若し魯國に道の傳ふるとあらざりしならば、古代の宗教の中に加はり、舊都、寒村の間に空しく懐古の情を催さしむるのみなる可し、決して十九世紀の文明の間にはあらざりしならむ。魯國に道の傳はりしハ近世の事にあらず、紀元九百年の頃魯國イーゴリー公爵の妃オリガ、コンスタンチノールに來り、基督教を信じ、洗禮を受けて其國に歸りしとあり。當時魯國は未だ統一の君なく小村の君主のみ其境界を争ふの時なりき。オリガの孫ウラジミス公は勇武の君主なりき。終に魯國を一統し、勢威北邊に震へり、公は其英武に於て他の邦國に譲らずと雖も、如何にせむ其國民は蠻野を去ること遠からず、慨然として其不文を歎じ、宗教を以て救はむと欲するの念あり、恰も好しコンスタンチノールの帝室の爲に外寇の難を助けミハイエル帝の妹を我が妃と爲すの允許を受け、又基督教を傳へむことを請ひ、一ツは皇帝の姻戚となりて其家系を貴くし、一ツは傳教によりて其國の文化を進めたり。これより希臘教は魯國に傳播し終に今日の隆盛を見るに至りしなり、故に希臘教を奉ずる國にて全く獨立したるは、魯國を除けば僅に希臘、ルーマニヤ、ブルガリア、セルウィアのあるのみ、この國々すらも辛くして五國の名あるなり、他は回教の間に在りて土耳其帝國の版圖なり。

### 第九章 新教

「プロテスタントチスム」とは拒不受の意なり、或は耶蘇新教と稱す、拒不受は天主教に對する故なり、新教とは革新の義なり。拒不受の義は可なりと雖、新教とは稱し難し、若し時代を以て天主教の舊に對せば新と云はむも可なるのみ。又獨逸の大賢マルチン、ルーテルを以て教祖と云ふ可きに非ず、ルーテルは革新者の一人にて實に動機を興へしのみなり。新教の興りしは革新家一人の力に非ず、宗教家のみ立命安心より發せし必要にもあらず、實に歐洲の時運は基督教の革新を要せしなりき。

羅甸人種の以太利、佛蘭西、西班牙等は既に文明の頂點に達せり、獨逸人種の英、獨、蘭は未だ歐洲の野に翺翔すると能はず、又天主教は教勢の旺盛を極め既に日の中天に昇りしが如し、又文明の氣運は其萌芽を現はし、印刷術は獨逸に起り、天文學は波蘭のコポルニコスの手に由りて一大發明あり、況んやコロンブスの新大陸を發見するあり、ガマの喜望峯を廻れるあり、其他政治上の傾向も新陳代謝す可き時となりぬ。聖書を反譯せしが爲に其死屍をも焼きて灰を河中に投せられし英國人、ツイグリフの信仰、天主教の監督或は牧師等の惡風を非難し爲に鐵鎖に縛せられて猛火に焼かれたるホヘミヤ國人、ホッス等の信仰ハ、燒くこと能はず、サボナルラの死後二十年に至らずして終にルーテルがウイテンベルグ

の會堂の扉に貼りし九十五箇條の説は世にあらはれたり。紀元一千五百十七年なりき  
 (我が後奈良天皇の天文年間なり)。ルーテルの信友碩學メラクソンあり、又同時に激烈  
 なる革新家ツウングリーあり、革新の嚆矢となりたるは此三大家と云はざるを得ず、然し  
 ながらメラクソンの學者風なり、ツウングリーは過激家なり、ルーテルの開きし教會は  
 其感化獨逸の二三ヶ國に限られたり。時に稀世の神學者カルウインあらはれて亂麻の如  
 き議論を整理し、一大神學を組織し、爲に革新の事業は其基礎を奠めたり。カルウインの  
 神學は佛國蘭國獨逸國にも行はれ、特に蘇國の長老教會に於ては堅く其説を守りぬ。か  
 の英國の清教徒も亦た氏の説を信じ、天賦の自由を振興したり、今日の米國は此の清教徒  
 の感化に由りて國民の元氣を養ひ得たるなり。嗚呼、革新の大業は獨逸國サキソニーの  
 ルーテル、同く獨逸國人のメラクソン、瑞士國のツウングリー、佛國人のカルウインの四氏  
 の手に由りて成れり。カルウインは最も遅く世に出でたり。ゼチバに於て盛むに教を説  
 き神學を講せしは紀元千五百四十年の後なれば、ルーテルがウイテンブルクの會堂の扉に  
 九十五ヶ條を掲げしより二十三年の後なり、ルーテルは紀元千五百四十六年に死したれ  
 ば、カルウインの盛時はルーテルの晩年なりき。以後宗教界の名士は踵をついで輩出し、佛  
 國にコリニーあり、バルトロマイの屠殺の夜に死す、紀元一千五百七十二年、蘭國にはオラ

ンダのウリアムあり、英國にチンダルあり、蘇國にジョン、ノックスあり、革新の元氣は歐洲  
 を包みこの間に血雨の慘劇も多かりしと雖も、爲に文明の氣運一振し、頓に人文の開化を  
 進ましめたり。されど天主教を離れ新教を奉せしは英、蘇、蘭、獨、瑞、士、瑞、典、諸、威、哇、馬の諸國  
 にして、新教の入り難くして依然天主教を奉せしは佛、西、葡、澳、以の諸邦ありき。今は諸邦  
 國に奉教の自由を與ふると雖も歐洲の北方にては新教南方にては天主教を以て多しと  
 爲す。北米合衆國は新教に由りて國民に敬神愛國の大事を養ふと雖も、日夜に増加する  
 殖民は四方より様々の宗教をさへ輸入す。南亞米利加は西葡の殖民よりして國をなし  
 ぬものなれば新教は多からざるなり。  
 教義は聖書を天啓の書と信するが故に、天主教、希臘教と同じく大體の信仰に於ては違ひ  
 しことなし、然しながら天主教の條下に於て記載せし、紀元一千五百六十四年ツレントの  
 會議の後羅馬法皇の布告せし信仰箇條十二ヶ條中第一のニカヤの信仰箇條の外は殆ん  
 ど皆な反對する所なり。七大禮の如きは其式を異になせども、聖體、罪の懲戒、或は告悔末  
 期禮、或は聖傳の外は斥けず、否、重むること、兩派に譲ることなし。  
 教政は其派に由りて其組織を異にすれども、大體は監督、政治、長老、政治、合衆、政治の三なり、  
 其教職も亦た甚しき相違なき。監督、牧師、教師、長老、執事あり。英國教會には大監督あり、

大執事あり。「メソヂスト」教會には長老司あり、組合教會にては長老を置かず、執事を置き長老教會にては監督を設けず又執事に女をも選み近くは女牧師さへあり、又「フレンド」教會の如きは牧師さへ置かず、一方には英國監督教會は殆んど天主教、希臘教と異なることなく、一方又は組合教會、浸禮教會、「フレンド」教會の如き比較上より完全なる教政と云ふ可き組織のなきものあり。

教派の多きは新教の大缺點なれど、勢の向ふ所は止むを得ざるごとく、云ふ可きのみ。元來「ルーテル」が九十五個條を掲げしは、特に新教を建設せむと思ひし爲には非ず、法皇の専横を憤はり、法皇は信者に未來の懲罰を免かれしむる權なく、又教職にある者によりて罪の教を得るよりは、義の行爲を以て悔改するを正しと論じ、當時濫賣せし謝罪券の非を鳴らし、ありき。然れど謝罪券の如きハ弊の末なれば、終に其基本より動かさざれば能はざるに至り、天主教と離れ當時教會の信する所の謬誤を擧げて論じ、聖書を獨逸語に譯して民間に容易に讀むことを得しめ、獨身説に反して「カタリナ」を娶りたり。されど「ルーテル」は今日より見れば頗る保守的人なれどかの「ツウイングリー」に至りては古傳の風習は盡く改めむと爲し、末流に至りては天主教の會堂に亂入し、祭器を毀ち「マリヤ」の像を地に倒し、宗教家にはあるまじき所業も少なからざりき。斯くして天主教の一大統一は亂れ

たれば其未終に收合す可からず、其宗派を擧ぐれば

- (一) 監督教會(エビスコパル)
- (二) 長老教會(プレシビテリアン)
- (三) 「ルーテル」教會(ルーテルン)
- (四) 組合教會(コングレゲーション)
- (四) 浸禮教會(バプチスト)
- (六) 改革教會(ダッチ、リフォルムド)
- (七) 「メソヂスト」教會

この監督教會にも英國派、米國派あり、改革派監督教會あり。長老教會には蘇國南北「コンブランド」、一致の五派あり、「メソヂスト」にも美以美、カナダの兩派あり。

- (八) 「グライスタアン」教會
- (九) 福音教會
- (十) 「フレンド」派(クエーカー)
- (十二) 普及福音教會
- (十三) 再降教會(アドウエンチスト)
- (十三) 「ユニヴァーサリスト」
- (十四) 「ユニテリアン」派

この他に「モレウイン」派、「フレマズプレセルン」派等あり、若し詳細の小差別を以て分つ時は未だ數派あり、教派に屬せず唯傳道の爲に設けたる何々會と稱するものに至ては歐米諸國に多きと指を屈するに暇なし。以上の諸教會の中に於て第九の福音教會までは正統派オールドと稱する人々が基督教の教會と認むると雖も、第十の「フレンド」派より以下は正統派より

頗る批難ある教派なり、近時我が國に傳教する「ユニテリアン派」の如きは殆んど基督教派には屬す可からざるものなり。夫れ新教には英國監督教會の如き大監督あり、威儀を具へし祭服あり、勳す可からざる嚴正の神學あり、高派(ハイチヨルチ)と稱するもの、如きは、他の宗派を見るに正統の教會と爲さず、是も新教の一派なり。然るに「ユニテリアン」は主義の宣言に「ユ」教徒は信ず、舊新約全書は古代人類幾多の著書を蒐集せるものにして、固より誤謬の存するあるも、人類の宗教的性質を表明せる最良書籍の一なり、又基督は精神界の最大なる預言者なり、宗教的教訓を垂れ以て人類を導きたる諸師の最高なるものなりと掲ぐ、氷炭霄壤の差も大なる奇觀と云ふ可きのみ。

斯く宗派は分れ來りて統一することなく、頗る亂雜の觀ありと雖も、この間に一世に傑出せし名士多く活潑にも生命を教會に與へたり。其中の録々たるは

- ボンヤン、ゼレミイ、テヨル、バクスター、ジンジン、ドップ、ウエスレー兄弟、ホイットフィールド、ニユートン、ワット、ドドリッチ、ハオールド、エドワード、シユライ、エルマ、ハニア、アンド、トローク、チャルメルス、チャン、ニング、エモルソン、

の諸氏ありき。故に新教は分派多しと雖も、爲に基督教會は活氣の絶えずと評するは過言に非ず。

傳道は内外國ともに新教徒の力を盡す所あり。外國傳道は夙く天主教の勤むる所なりしが今日は新教の勢威も頗る盛なり。其景況の概略をあぐれば左の如し

- (一)日本國 (二)朝鮮國 (三)支那國 (四)緬甸並暹羅國 (五)印度國 (六)土耳其國

(七)亞弗利加諸地 (八)太平洋諸島 (九)布哇島 (十)南洋諸島等  
北は千古氷雪に閉さる、北極地方、南は未だ人肉に舌を鼓する赤道直下の孤島に至るまで、傳道師の足跡のあらざる所なし、恐らくは西藏國の内地にも入りし者ある可し、亞弗利加内地さへも疾くに傳道師は跋躡せり。

傳道會社の重なるは龍動傳道會社、福音擴張會社、蘇國傳道會社、米國傳道會社、米國長老教會、傳道會社、其他獨佛等の諸國にも傳道會社あり、其集金も一年百萬圓以上に昇るものあり、米國に於ては長老教會傳道會社最も集金の多額なる會社なり、この他に數人或は二三の有志家にて、傳道或は女子教育等の爲に外國へ教師を送ることは實に夥多しき事なり、數年前の統計に由れば英、蘇、米、獨等の傳道會社に一ヶ年の寄附高は八百萬圓餘なりとあれば今は千萬圓餘の巨額に達するなる可し。傳道師の男子のみにて三千人餘あり、此も亦た數百人の増加なる可し。他に傳道、教育、醫術、慈善等の事に働く女子の數千人なる可し、如何なる不信仰の者にて、洋中の孤島に着し宣教師に面を合はすれば、其德義に感ずる

どゝもに心嬉しく覺えざるはなしと云ふ。十九世紀の新教の外國傳道は歴史上の一大壯觀と云ふ可きなり、其結果の如きは二十世紀に於て收獲し得らる事ならむ。傳道師の有名なるは

ケリー

(傳道會社の首唱なり、英國人にして千八百三十四年に死す)

モリソン

(支那の傳道師なり、千八百七年より廿七年間働けり)

ウリアム

(全千八百三十年より四十三年間働けり)

ジヨチソン

(緬甸の傳道師なり、千八百十年より三十八年間働けり)

ケリー

(印度の傳道師なり、千七百九十三年より四十年間働けり、前のケリーと同人なり)

マルチン

(印度にて聖書の反譯に従事し、僅に六年間の働なれど其感化頗る大なり、千八百十二年に死す)

ドツフ

(印度の傳道師なり)

モハット

(亞弗利加の傳道師なり、五十年間働きて千八百八十三年に死す)

ハンニントン

(全千八百八十四年ウイクトリア湖邊にて蠻人の爲に害せらる)

ウイリアムス

(南洋ソサイチー島の傳道師なり、廿二年間蠻人の爲に働き、千八百卅九年蠻族の爲に殺されたり)

年蠻族の爲に殺されたり)

ホンテ

(八肉を喰ふフジ島にて十年間働きたり)

ケター

(メルニシヤ島にて千八百四十一年より廿四年間働きたり)

パテソン

(千八百五十四年より十七年間太平洋海中の諸島を巡りて家に歸らず、終に蠻民の爲めに殺さる)

傳道の外に尤も力を盡すは社會の惡徳を矯正し、家庭の美風を養成するなど昭々たる事實なり、爲に日曜學校は百年前より起りて初は貧者の子弟にのみ書を讀むことを教しへ、聖書の畧解等を學ばせしが、今日は説教壇の外に信者に解説的に聖書等を教ふる所となり、爲に一般の信徒の教理等を知るに至りし益は實に大あるものなり。又奴隸賣買を廢し、或は禁酒、禁烟、其他矯風、慈善の實際的の働きは教會史上未だ曾てあらざる事なりき。活潑に社會の改良を計る事に於ては天主教、希臘教も數歩を譲らざるを得ず。特に米國(合衆國)の諸教會は頗る活潑なるものなり。

# 儒教

## 第一章 總論

宋太祖御製宣聖贊に

「王澤下衰、文武將墜、尼父誕生、河海標異、祖述堯舜、有德無位、哲人其萎、鳳鳥不至。」

とあり、孔子の一代を數字の中に盡したるものと云ふ可し。

祖庭廣記には

「先聖有異質、凡四十九表、面如蒙、棋手垂過膝、立如風峙、坐如龍蹲、手握天文、足履度字、望之如仆、就之如升、視若營四海、躬履謙讓、胸有文、曰制作定世符、身長九尺六寸、腰大十圍。」

其形狀の斯くの如くなりしや否やは信じ難しと雖も、其品性を考ふる時には元より凡庸の人に非ず異質ありと云ふも可なり、天文を握り度字を履みしと云ふも亦た可なり。

抑、儒教は他の佛基兩教と頗る異なるものにして、定義の如何に由ると雖も、宗教と稱し「レ」リジョン」と唱ふ可きものには非ざる可し。ウエブスル氏の大字典に由れば「レ」リジョン」(Religion)を解して、

“The recognition of God as an object of worship, love and obedience, or right feelings towards God as rightly apprehended.”

即「レ」ジョン」とは神を認識し、禮拜、慈愛、從順を以て、誠意之に對するの意義なり。儒教も天を説かざるには非ず、上帝と云へる名はありと雖も、之を他の二教と並べて論せむは頗る穩當ならず、所詮「レ」ジョンに充つる所の譯字の教は名詞にては、教訓の義となり、動詞に用ふる時には、教ふるの意にて、禮、樂、射、御、書、數の六藝を教しふるの義と同じ。我が國人は宗教の語を以て恰も「レ」ジョンの意に解すと雖も、支那人に至りては頗る難解の文字なり、支那に於てまづ其義に近きは、祝字にして祭司（ブリースト）は巫字に當れり。儒教には巫祝に似たることなし、斯れを宗教と稱するは其感化の大なると又或點の宗教に頗る似たるが爲のみ。

支那史の事は茲に述ぶる要もあらざる可し、我が國人は近時まで國史を講せずして支那の歴代の沿革に明かなりし人ありし程なればなり。然しながら一言すれば支那は特有の長所ある國にして他に化せらるゝ事少なく己は能く他を化するの國民なり、故に宗教、文學、政治等百般の事物他を借らずして自家より發達せしめしなり、佛教の如きさへも大乘

教は支那に入りて發達し頗る漢人の趣味を帯びしが如し、特に天台宗、禪宗に於てこの支那帝國の歴代中に於て文化に進み開明に達せしは、周、漢、唐、宋の四朝なり。儒教の進歩も亦た此時にありしなり。今日支那政府は衰運に傾むくと雖も未だ他に化せられず、我が邦土に來れば能く他を化する力ある人民億を以て數ふるあり。況んや我が國上中流の士人には武士的精神と共に儒教の感化力は今もなほ盛むなるあり、人誰れか忠孝仁義の四字に對し容を斂めざる者あらんや、仁義は經あり、忠孝は緯なり、以て我が國風は倚持せらるゝと云ふも過言、溢美にあらず。儒教も如何に衰退せしとも支那より除かば支那帝國も亡び支那人も滅す可し。儒教の感化力は今世に於て見ること稀なりと雖も、今日もし仁義忠孝の觀念を日本帝國より取り去らば日本帝國の前途は杞憂に堪えざるものあらん。嗚呼、儒教は東洋の文化の基礎となり、開明の柱石なり、儒教なかりせば、支那は印度の轍を踏みて獨立せず、我が國は武士的精神に乏しくして、墨夷の來りし時に云ふ可からざる國辱を受けしならむ。東洋諸國の人民は儒教的精神は失なふ可からず、益々其神髓に達す可きなり。

儒教には上帝又は神、天の名ありと雖も、其性を考ふること深からず。然しながら易經に乾坤の字あり、この乾坤即天地の靈よりして人を生ず、茲に至りて天地人の三才成るなり

とあり。故に乾坤、天地、陰陽、魂魄等の語あり、儒教は二元論と稱す可し。この乾坤、陰陽等の哲學的觀念は發達して宋朝に至りては殆んど儒教以外に出でしが如き觀ありき。されど周より以上に湖のほれば萬國の古代史に見るが如く、純然たる宗教的祭祀の法あり、天に對する所も他の國民が神に對するると一般なり。周官には

「冬至祀天於南郊、迎長日之至、夏日至、祭地祇、皆用樂舞而神乃可得而禮也。」

尙書には舜在璇璣玉衡以齊七政、遂類于上帝、朝于六宗、望山川、徧群神、輯五瑞、擇吉日云々とあり。又成湯が桀を南巢に放ちし後に天下大旱すること七年、太史(天文方なり)は之れを占て曰く人を以て禱る可しと。湯は曰く吾が請ふ所は民なり、人を以て禱らむには、吾れ自ら當らむと齋戒して爪を剪り髪を斷ち、素車白馬にて身を犠牲と爲し、桑林の野に禱り自ら責めし事あり。成湯豈に蒼々たる天に禱る者ならむや必ず活潑々の神ありと信じて身を犠牲になし、なり。脯酒、牢具、珪幣等の典禮を詳細に知る時は、決して宗教の要素を欠きしものに非ず。天命、天道、天意等の語は確然神を認めて之を敬し之に遵ふことを求めしなり。封禪の禮を以ても、天地に對し嚴肅なる心あるを見る可し(天子自ら泰山に上り土を築きて壇と爲し以て天を祭り之を封と云ふ。泰山を下りて小山上の地を除し祭る、之を禪と稱す)。斯く天を祭り上帝を敬ふと雖も、孔子は神性に關したること又は

祭祀に就きて前人の教るよりも更に深く教ふる所ありしには非ず。

無極より太極、太極より兩儀を生せしと云ふ說あれども、最も陰陽説を重しと云ふ可し、陰陽は萬物の根本にて是より森羅萬象は生ず(朱熹曰天以陰陽五行化生萬物、陰陽は木火土金水の五行(元素)を生ず、恰も陰陽は地球の南北極の如く、電氣の積極、消極の如し。天地も陰陽なり、日月も陰陽あり、男女も陰陽なり。この陰陽五行より成りし物にて最も靈にして尊貴なるを人とす。故に儒教は太古祭天の遺風は存すると雖も、重に乾坤陰陽より割り出したる理を以て安心立命の立脚地を設けしものなり。傾向斯の如くなれば世運の進むに従がひ、儒教は宗教的の觀念を佛敎道敎に譲り、政治道德的の應用をのみ講ずるに至り。儒教は天を以て萬物萬事の根原となし、この天命に由りて聖賢も生れ、帝王も位に在り、この天命を奉じ禮樂を以て庶民を治む、天職の字は之れに由れり、又た人はこの天命に従ひて心を正しふし身を修め家を齊へ君父に仕ふ可きなり。中庸に天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教の本文あり。一言に評すれば、天職を奉ずる賢王良相は上に在りて禮樂の法を以て庶民を子弟の如く撫育し儀式的に天下を治め、萬民は又天命に従ひ君父長上を敬し、妻子好合し、祖先を祭り、産業を勤め、其分を明に爲す可し。而して君臣の間の治まれるとは草の風に靡き、衆星の北辰に向ふが如く、萬民鼓腹擊壤の樂を得さしめむと欲



するに在り。さて黄金世界は後世に在る可きものか前世に在りしものかと考ふるに世は次第に澆季になれり、正しく堯舜の昔こそ黄金世界なれ、其古代の治に復する時は堯舜の世を見ることを得んと理想せしなり。故に温故知新、先王之道、三代之禮、古之道、先王之遺風等の言あり、堯舜禹湯文武周公は孔子の崇拜せし聖賢なりき。今日の日本人は明治前に生れしを歎き、二千五百年前に生活するを悲しみ、願くは明治萬歳の後に生れ三千年後に生活せしを歎き、心霊上も物質上の開化も進み吾人の幸福益々大ならむと思ひ世の黄金時代は遂に千載の後なる可しと信するなり。されど儒教的薰陶に酔ひし支那士人は不幸にして清朝の末に生れたり、明代に生れしならば幸なりしならむに歎き。明は宋、宋は唐、唐は秦漢、漢は周と溯ぼりて常に末世の澆季を歎じ、政治、道德、文學社會の事物盡く古を師として夢みるさへも茅茨剪らず土階三尺の蠻風のみなりき。斯道の力あるも堯舜的理想なり、斯道の爲に保守の弊を長せしも堯舜的理想なりき。來世に關しては明亮なる説なし。靈を論ずるに至りては孔子も鬼神の存在を認知し、鬼神之爲德其盛矣乎、又は非其鬼而祭之諂也、とあり。張子は鬼神は二氣の良能なり、朱子の鬼は陰の靈なり、神は陽の靈なり、其實一物のみとあり。孔子の時代には解説は深からずと雖も、鬼神を畏敬奉承する念は厚く、宋代に至りては解釋高遠にわたる、鬼神は陰陽合離

の所爲と説き、如在其上、如在其左右など、云ふ感情は頗る薄くなりしもの、如し。善惡の責罰も來世にはわたらず。禍福の善惡の報なり、天理昭々、天網恢恢、賞罰の遠はざることは知れども、尤も心を盡すは内にありて外にわらず、故に天使鬼差を信せず、元より天堂地獄輪廻等の説なし。詩に曰く、潛雖伏矣、亦孔之昭、故君子内省不疚、無惡於志、君子之所不可及者、其唯人之所不見乎。又曰く、相在爾室、尚不愧于屋漏、故君子不動而敬、不言而信など、あり、來世の賞罰よりも先づ居敬省察を重しとなせり。過則勿憚改と悔改の道はこの語にあり、程子も學問の道に他に無し、其の不善を知れば速に改め、以て善に従ふのみと云へり、以て推考するに足らん。

儒教の經典は十三經なり。

易經、周易。書經、尙書。詩經、毛詩。禮記、戴禮。春秋、左傳。孝經。周禮。儀禮。公羊傳。穀梁傳。爾雅。論語。孟子。

易經は天地陰陽の理を示し、伏羲氏以來の古書なり、孔子に至りては易象繫象說卦文言を序すとわれば編輯して註解を下だせしなり。書經は先王の世の詔勅記錄の如きものなり。禮記は上は祭祀の法より下は父子の間の式作法を記載せしなり、春秋は魯國の史なり、孝經は孝道を論じ、周禮儀禮も禮記に似たるものなり、公羊、穀梁は注解なり、爾雅は辭典

なり、論語は孔子が弟子と問答せし記録にて孟子は孟子が諸國を遊説せし時の論説なり。十三經の中を分ちて又六經、四書と云へり。四書は大學。中庸。論語。孟子。

六經は五經に樂經を加へ或は五經に四書を加へて稱せり。然しながら儒教の骨髄は學府論語に在りて存するなり。此他小學ありて兒童の爲にす。書經には後世挿入せし文ありと云へり。十三經の目ありと雖も四書に通ずれば儒教は了解するなり。佛基兩教よりも簡易なりと云ふ可し。或人四書の字數を擧げたり。

論語 一萬二千七百字。

孟子 三萬四千六百八十五字。

大學 千八百五十一字。

中庸 三千五百六十字。

計 五萬二千八百四字。

儒教は以上の如きものなるが故に、他教の宗派の如きものなし。支那にては程氏二子、朱子、陸象山、王陽明等あり、我が國にては仁齋、徂徠、羅山等ありと雖も、元より宗派には非ず、學派なれば軋轢のなきにはあらざれど、佛基兩教の宗派と同日に視る可きものにわらず。儒教は孔子より發り、曾子、子思と傳はり、孟子は子思より教へられて正宗を得たり、醇乎醇者の評ある所以なり、韓子も孟子なからむには被髮左衽にして言侏離せん、功は禹の下に

在らずと嘆賞せり。孟子の以後は特に大見識を以て斯道を發揮せし者も少なく、漢には董仲舒、韓愈等の諸子ありたれど、其見透徹せず、其說痛快ならず、儒教の中興に力あるは實に宋の周茂叔(名は惇、願、號は濂溪)。程明道(名は頤)。程伊川(名は頤)。張橫渠(名は載)。邵康節(名は雍、字は廉夫)の諸先生なり。特に二程子、明道、伊川の兄弟は中興の祖と仰ぐ可し。(孟子を去こと千四百年)二先生卒て後、更に斯道を煥發せしは朱子なり、名は熹、號は晦庵。周茂叔は明道、伊川に教へて、伊川先生の門に楊時あり、この楊時の門に羅從彦あり、朱熹は羅氏より業を受けしなり。伊川先生は徽宗の代に卒し、朱子は南宋の寧宗の代に卒す、世に道學と稱するは程氏の學を曰ふなり。道學は頗る訓解にのみ從事するの弊なきに非ず、朱子と時を同じふして陸九淵あり、象山先生、朱子の學風を好まず、悟入の説を以て道學に反對し、一家の學を爲せり。明に至り陳白沙、程篁墩等出に世で、陸象山の説を取り終に、王陽明(名は守仁)の出づるに及び、天下靡然として陸氏の學風に從ひぬ。然しながら陸王の學にも弊なきには非ず。特に陽明に至りては陽、儒、陰、佛の評を受け、再び魏晉の雅尙清談となり、空虛に馳せて實地を踐む者鮮なかりしなり。茲に於て朱陸正邪の論あり、されど清に至りては朱陸ともに振はず、我が國に於ても餘姚の流を汲みし中江藤樹の如き大儒あり、大鹽中齋の如き人あり。朱學は惺窩、羅山以來、徳川政府の取る所にして、朱門に

非ざれば儒としては世に立ち難かりしなり、二百年間は全く洛閩の學派の人のみと云ふ可し、仁齋の古義學の天地一元氣論も徂徠の古文辭學の禮樂論も一世に鳴りしまでにして大なる感化はなかりしなり。種々の評あれども我が國の儒教は朱子學派と云ふ可し。大意の末に朱子學の一斑を掲げむ。

釋尊の慈悲、基督の愛、孔子の仁、皮相より窺へば頗る似たるものと雖も、教祖の一代と門徒の傳記を讀む時は其教の着眼点を容易に知り得べきなり、釋尊の廣長舌を以て印度の哲學者宗教家を辯倒し國王庶民に尊敬せられ伽藍に居りて阿羅漢に圍まれ、尼連河邊にて涅槃に入り其遺骨は寶塔の中に置かれたり。基督は譬喩を以て語り稅吏罪人の友となり、祭司學士に棄てられ薄信の弟子を従へカルバリ山の十字架に死し、遺骸は二三の信者の手にて葬られたり。孔子は魯の相となり、詩を刪り樂を正し、弟子三千人あり、七十三にて卒す、弟子皆な心喪を服し、孫には子思ありき。故に孔子の教を奉ずる者は超然たる出世間の人なく、火の如き熱信の人なしと雖も、治國平天下齊家修身の箴を守りて經世の爲に力を盡す者多し、大儒は多く政治家にして傍ら詩文に通ず、儒教は頗る實際に適したるものなり、惜しむらくは保守に傾きて今日に適せざる所あり。

又儒教は忠孝を旨とし或點よりは說者に頗る便を與ふる所多し、支那に於て歴代の朝家

に崇尊せられしは理ありと云ふ可し、唐太宗貞觀十四年帝自ら國子監にゆきて釋尊の禮をなし、天下の名儒を集め、經に通ずる者は貢舉を得ることを聽き、當時國學に入る者八千餘人ありしと云ふ。歴代の朝家に於て(元清さへも)人を擧ぐるには必ず儒經に通せし者を取れり、儒教は支那の國教と云ふ可し。

## 第二章 孔夫子

### 誕生より周にゆき魯に歸る時まで

孔子家語に由れば孔氏の家系は左の如し。

帝乙之元子、紂之庶兄

微子啓

微仲微子弟

宋公稽

丁公申

襄公熙

厲公方祀以下世爲宋卿

宋父周厲公兄弗父何子

世子勝

正考甫

孔父嘉以下爲公族

木金父

宰夷

防叔自宋奔魯

伯夏

叔梁紇

仲尼丘孔子

伯魚

子思伋

孔子は周靈王二十三年魯襄公二十四年魯國昌平鄉陬邑に生る(我が朝にては綏靖天皇の三十三年、基督紀元前五百五十一年なり、英國人ロベルト・ドゥグラスの推算に由る)母は顔氏にて叔梁紇の繼室なりと云ふ。史記に「紇與顔氏女野合而生孔子」とあり、野合とは

禮に合はざるを云へることにして、當時梁紇は年老ひ、顔氏の三女徴在は年少く、壯室初笄の年に當らず、配合禮儀に合はざるが故に野合と稱するなりとの説なり。叔梁紇が婚姻を顔氏に申しこみし時、顔氏には三女あり、第三女をば徴在と云ふ、其時顔父は面を正し、して三女に問ひけるやうは、阪大夫は、叔梁紇は、陝邑に住したればなり、父君も祖父君も士たりと雖も、其壘祖を考ふれば、聖王の裔なり、殷湯の帝乙なり、かつは亦た叔梁紇しも身の丈は十尺あり、武勇は絶倫なりとて人に許されたる人なり、父は良縁と思ふなり、年こそは、關たれど性質は嚴肅なり、人品も亦た稀なる人、三人の中に於て誰か、阪大夫の内室とならむと存する者ありやと問ふ、さすがに未だ、裏若き身をもちて年たけし人の妻とあらむと應ふる者なし、時に第三女の徴在は袖まざるつゝ、何事も父君の可なりと思さむには否、申す可き事や候ふ可きと答へたり。顔氏はいみじくも答へたりと思ふ色にて、爾能、矣と云ひしが、遂に徴在をもて叔梁紇の妻となせり。これを大聖孔子の母にぞありける。後に徴在のみ私かに尼丘山にゆき、禱りて孔子を孕みしなりとぞ。又は夫妻ともに禱りしなりとも云ふ、又未だ生れざる時に麒麟あり、玉書を闕里に吐き、其文に、水精子繼衰周而爲素王とあり、顔氏見て異なる事と思ひ、繡紱を以て麟角に繋ぎ、信宿して去ると云ふ説もあり、或ハ誕生の夕にあたり、顔氏の房にて、鈞天の樂空中に響きわたれり、天聖子を生むこ

とを感じ降すに和樂の音を以す故に孔子生れて、異質ありと云ふ説もあり、儒教を奉ずる者の前説の如き瑞祥を尊とみ信ずる事少なしと雖も、人には吉凶の瑞祥を氣に爲す特性あり、斯る傳説のあるも餘儀なき事と云ふ可し、基督の生れし夜に、牧羊者に天使あらはれて天軍と、もに讚美して曰く、在上則榮歸於神、在地則和平人沐恩澤矣。又釋尊の生れし時、天に妓樂あり、歌唄、讚頌、燒香、散華、天衣、瓔珞を雨したりとあり。國家將興、必有禎祥、國家將亡、必有妖孽との本文もあれば、聖賢の生るゝ時は瑞相のありしと思ふは人の性情ならめ。

孔子の首上扞頂なり故に丘と名づく、と史記にはあれども、家語には尼丘の山に禱りて生れしゆゑに名を丘とよび、字は仲尼となせしなりとあり、齡三歳の時に父叔梁紇卒し、防山に葬れり。母の手にて生長せしが五六歳の時より既に群兒とハ異なりて、俎豆を陳ね禮容を設け、やゝともすれば儀式ばりたるを好み、尋常の兒童に非ず。學ばざる事を知りしにはあらざるも、神童たりしは疑ひなし。七歳になりて、晏平仲の郷學に入れり。平仲は孔子より其齡ハ兄なれども、後に孔子の友と記載せし所あるを見れば、深く其教を受けしにはあらざる可し。

孔氏は昔こそ王侯の家なれど、父の頃には家貧しかりければ、魯國の太夫季平子に仕へて

委吏となりぬ、菜盛之供、祭器祭品の設あるときは、廟に入りて祭の禮を助け、其時ごとに禮樂度數の事を問ふ。或人孔子を譏りて、甌人の子は禮を知ると云ふ評判なるに思ひきや、太廟に入る時は一々に事を問ふと云ひしかば、孔子は答て曰、是禮也と云ひしことあり、委吏は調度掛出納掛らしき役ゆゑ祭祀のをりには廟中に入りて世話を爲し、下役にも御用商人にも接したるなり。料量平かなりとの評あれば、頗る清廉なる良吏なりしなる可し。又司職の吏となりし事あり、司職は乘田と稱し、牛馬羊豚などを畜養する役なり、この役にも力を盡し、畜蕃息すと云へる好評ありき。當時は何歳なりしか詳に知り難し、雖も十二歳にて母卒し十九歳にて宋の上官氏の女を娶り、二十一歳にて長男伯魚生れたれば、かゝる卑官に居りしは若年の時と思はるゝなり。伯魚の名の生れし時に魯の昭公より二鯉魚を賜ひたれば、榮として其子に名づけしなりとぞ。子張が入官官吏の心得方の道を問ひし時に、孔子は有善勿專、教不能勿怠、已過勿發、失言勿撻、不善勿遂、行事勿留と教へたり、恐らくは孔子が實踐より得來りしものなる可し。

孔子三十歳の時に晋に適き、琴を師襄に學べり、この襄子と云へるは擊磬の伶人なれど、琴をも能くせり、音樂に精通し、後に海に入りしとあれば、此人も亦た清逸の人なりしなり。孔子其初は節奏をのみ習ひしが、やがて神に入り心と琴と一致し、終には文王が琴を彈す

る如く、正聲人を感じ、順氣之に應じ、順氣象を成して、和樂興れり、穆然として深く思ふ所あり、怡然として高く望むで遠く志す所あり、其貌黜として、黒く、頽然として長し、恰も文王の其座に在すが如し、襄子席を避け再拜して曰く、文王操也と、操は曲あり。孔子の其禮樂に頗る心を用ひしことは人の知る所なり、惜むらくは吾人其論を讀むのみにして、其妙を味ひんに道は絶えたるなり。舜は五絃の琴を彈じて南風の詩を作り吟じて曰く

「南風三薰兮、可以解吾民之愠兮、南風三時兮、可以阜吾民之財兮、」

孔子又周の寶車賈に教へて曰く、居吾語爾、夫樂者象成者也、摠干而立、武王之事也、發揚蹈厲、太公之志也、など云ひしことあり。孔子初は樂に通せず、禮を問ふが爲に南宮敬叔と周の守藏吏老聃を訪へり、時は周景王二十三年魯昭公二十年にあたり。孔子が東周の都洛陽に上りしは、恐らくは一代の一段落にして、觀周の後に思想は一進歩を爲し、ならむ。周に上りて先づ禮を老子に問ひしに、老子は戒めて曰く、子所言其人、與骨皆已朽矣、猶其言在耳、且君子得時則勳、不得時則蓬累而行、吾聞良賈深藏若虛、君子盛德容貌若愚、去子之驕氣、與多慾態色、與淫志、皆無益於子之身、吾之所告子者、若此而已、と又孔子周を去るに及ぶ時に、老子送之曰、吾聞富貴者送人以財、仁者送人以言、吾雖不能富貴、而竊仁者之號、請送子以言乎、凡當今之士、聰明深察、而近於死者、好讎議人者也、博辯閎達、而危其身、好發人之惡者也、無

以有爲人子者無以惡己爲人臣者。孔子曰敬奉教と答へて去れり。後に孔子は弟子に謂へることあり、烏吾知其能飛魚吾知其能游獸吾知其能走走者可以爲罔游者可以爲綸飛者可以爲矰至於龍吾不能知其乘風雲而上天吾今日見老子其猶龍耶。と嘆じたるは五千言を著したる老聃なりき。孔子は又樂を長弘に問ひ或は周の太廟中に歌器を見て宥坐の器なることを知り、虚なれば歌つ中なれば正し滿れば覆へる、持盈の道は此器にありと弟子に教へしとあり。其時歳三十身の長け九尺有六寸あり長人と謂ひて人異となせりとぞ。魯に歸りて弟子益々多し。

當時は春秋戰國の代なれば中原殆んど寧日なく魯國より論ずれば西邊の晋は平公暗愚にして六卿權を擅にしや、もすれば近國を犯さむと爲し、南方の楚は兵強くして中原を併せむと爲すの勢あり、東隣の齊は大にして魯を壓せむと爲すなり。魯は列國の中に於て小弱すれば楚に従ふ時は晋怒り、晋に附かば楚の爲に討たれむ、況んや齊は日夜に國境を侵さむとするあり。國勢かくの如く危殆なるに内亂あり、孔子は魯を去りて齊にゆき高昭子の家臣となり、齊の景公に政を教て尼谿の田を以て封せられ大に用ひられむと爲し、が晏嬰の爲に妨げられ、空しく魯に歸りぬ。

### 第三章 魯の大司寇を辭し衛にゆくに至る

孔子は魯に反りしと雖も魯の國政は云ふに忍びず、季氏は公室を借し陪臣國命を執り、季氏の嬖臣等權を争ひ陽虎は仲梁懷を執へ季桓子を囚へ我が足利の末を見るが如し。故に孔子は仕へず民間に在りて詩書禮樂を修め弟子に教へ遠方より來る者彌々衆し。魯國はますく亂れ陽虎は齊に奔り季氏の臣、公山不狃は畔き、孔子思ふ所ありて公山不狃の聘に應せむと爲し、が遂にゆかず。魯の定公孔子を用ひて中都の宰となす、時に齡五十に達せり。中都の宰とならざる前に公山不狃の聘せし時に、周文武起豐鎬而王、今費（費）は公山不狃の領地なり、雖小僮庶幾乎。又曰く夫召我者豈徒哉、如用我其爲東周乎。これ等の言を考ふれば當時孔子の胸間には鬱勃たる英氣ありて大に試むと欲せしもの、如し。嗚呼聖人の地位を得たるハ五十の後にして初めて中都の知事となりしなり。多年思慮して成算あることなれば一年にして孔子の政令は管内に行はれ養生、送死、長幼異食、強弱異任、男女別途、路無捨遺、器不削僞、四寸之棺、五寸之棹、因丘陵爲墳、不封不樹と云へるがごとく新法令の成績眼を驚かせり、一言に約すれば風俗慣習の一大改革をば司法、警察などこの權に由らず説諭して行われしめたるなり。累進して司空より大司寇となりぬ、大司寇の官は掌邦禁誥、姦惡刑暴亂とあり内務、司法を兼ねし大臣に似たり、周敬王二十年魯

定公十年に魯定公は齊景公と齊の夾谷に會することありき、孔子は大司寇の重きにあり、この會に一切の儀式を掌どり、大國の齊侯に對し國威を損せず禮を失せず、孔子一代の晴れ業ありき。兩國侯時の獻酬も畢りし時に齊の有司曰く四方の樂を奏せむと請ひ、旌旄羽旄鼓噪して至れり、四方の樂は優美高尙の樂にわらず、俗人は皆な齊の東邊にある萊人なれば殺伐なる蠻樂なり。孔子勃然として怒り歷階して進み曰く士以兵之吾兩君爲好、裔夷之俘敢以兵亂之と叱せり。齊公心に忤ちて退かしめたり。頃時ありて齊の有司は宮中の樂を奏せむと請ひ、倡優姝儒戲を爲して來れり。恰も是れ今日貴紳の席上に破廉恥漢が藝妓舞問の手踊りを爲さしむるが如き事なれば豈に孔子にして黙す可けむや、趨り進み歷階して登り一等を盡さず、曰く匹夫にして諸侯を熒惑する者は罪まさに誅すべしと呵し、請ふ右司馬速に刑を加へよと命じ、あはれむ可し手足處を異にせり。齊侯は其過を謝せむが爲に侵せし所の魯の鄆汝陽龜之田を歸せり。又定公の十二年には大夫少正卯を兩觀の闕の名下に誅せり、少正卯の人となりハ詳細に知ること能はずと雖も、魯國の聞人なりと子貢が云ひし所より考ふれば當時の名士にして魯國の政事界を擾す力ありし者の如し。孔子が子貢に少正卯の人と爲りを語りし時、憂心情々慍于羣小小人成羣斯足憂矣と云ふ詩を引きしを以て考ふれば、少正卯は政界一方の領袖にして性奸なる

人なりしと見ゆるなり。今や魯國は齊を屈さしめ少正卯を誅し聖人位に立ちたれば國大に治まり道に遺ちたるを拾はず、羔豚を賣る者も價を偽らざりしとぞ。孔子は次に權家の勢を削ぎ國權を中央に集めむと欲し定公に奏して臣聞く家不藏甲、大夫無百難之城、今や三家は制に過ぎたり、城を毀つ可しと請ひ、先づ仲由を以て季氏の宰と爲し三都をこぼたむとす、叔孫氏は郕城をこぼち季氏は費城をこぼたむと爲し、が孟氏のみ成城を損ずることを肯むせず、爲に國亂あり成は遂に損せず、以上の三氏は魯侯の一族にして頗る權力あり魯國を治めむには、三氏の勢力を削減せざれば一統の治を見ることは能はざるなり。時に孔子齡五十六、魯の官職に就き政治に關せしより僅に四五年にして魯は既に覇たるの實力を生ぜり。齊人は魯國の強大にならむとを恐れ、魯侯の心をみださしめむが爲に美女八十人良馬三十頭を贈り物となせり。魯侯も季桓子も城南の門外に出で、觀覽し終日政務に怠たりぬ。孔子は事のなす可からざるを觀て魯を去りぬ。史によれば齊人の女樂或は靡を大夫におくらざりし故孔子をして去らしめしが如しと雖も、恐らくは當時定公は孔子の徳政に満足せず、權家季桓子のごときも中心頗る不快なる事のみなりしならむ、故に孔子の言は行はれ難く大聖も望を絶ちしものなる可し。終に衛にゆけり。

第四章

衛に寓せし時より魯に歸へりて  
帷を下す時に及ぶ

昨日の魯の大司寇ありしが今日は弟子の子路が妻の兄顔濁鄒の家に住し、天涯の孤客とはありぬ。然しながら是れ元と尋常の客に非ず、衛靈公は粟六万を送れりと云ふ。衛に於ても用ひられず、陳に行かむとして匡を過ぎれり。匡人孔子を見て魯の陽虎とあやまり認め、嘗て陽虎の爲に其地を暴されしとありければ、孔子を拘留すること五日、辛ふして危難をまぬかれたり、當時孔子は絃歌して懽ます、弟子に教へて曰く文王既没、文不在茲乎、天之將喪斯文也、後死者不得與於斯文也、天之未喪斯文也、匡人其如予何。再び衛にゆき、蘧伯玉が家に在り、或時衛公は夫人と同車し孔子を次乗と爲し市街を遊びし事あり、孔子歎息して曰く吾未見好德如好色者也。衛を去りて曹にゆけり。曹より宋にゆき、大樹の下にて弟子と禮を習ひしことあり、宋の司馬役の名桓魋は孔子を害せむと欲し、先づ其樹を伐り、孔子殆んど危し。弟子は速に去らむことを欲せしが孔子は泰然として曰く天生德於予、桓魋其如予何。また鄭にゆき。道をあやまり鄭の郭の東門に獨り立ちしことあり、鄭人子貢に云ふ、東門に人あり其類堯に似たり、其項臯陶に類す、其肩は子産に類す、肩より

以下禹に及ばざること三寸なり、紫々として喪家の狗のごとしと。子貢は聞きしまゝに孔子に告げれば、孔子欣然として笑ふて形状はなか／＼左様の儀にあらず、然し喪家の狗のごとしとは適評なり／＼と云ひしとを聖人も時を得ざれば喪家の狗の評を甘んずるか噫。

陳にゆき衛に歸り、また陳に赴き道つひに行はれず、陳の憫公はたま／＼庭中に落ちし隼に奇異なる矢の貫かれたるあり、石磬の長尺餘なるなり、孔子に問ひて肅慎國の矢なることを知り博物の才に驚さしのみ。衛の靈公は軍旅の事を問ひ道に心あらず。當時群雄割據の時あれば國君は皆な國を大ならしめむと欲するのみ、軍旅の事にあらざれば、福利に關する事のみを大事と爲せしあり、世は孫吳、申韓、蘇張の出でむことを望める時なり。衛に在りし日、弟子と磬を擊ちし時に門外をば、賁を荷ふて過ぐる者あり、磬を聞きて有心哉、擊磬乎と聖人の心を知りて歎せしが、又曰く鄙哉、鏗々乎、莫已知也、斯已而已矣、深則厲、淺則揭、子曰果哉、未之難矣と、賁は草籠の如きものなりとか、隱逸の君子ありて孔子の磬を擊つを聞き河が深ければ衣をぬぎて歩行わたりし、河が淺ければ衣を掲げて渡る可しと、孔子の世渡りが深淺の宜にかなはざるをば識りしなり。孔子は老莊の學風とは反して天下を一日も忘れ難き人なるゆゑ、其通りの事ではあるが左様になせば世に困難と云ふと



はあらぬなりと、反駁せしなり。老莊と孔孟の立脚地の違へるは全く茲に在り。老子の眼より孔子を視て多欲淫志ありと評せしも世に對する着眼點の異なるが爲なり。趙簡子より晋國の卿なり聘せられ既に河を(黄河)渡らむと爲し、時に賢大夫竇鳴犢と舜華の二人趙簡子の爲に殺されたりと聞き河をわたらずして車を回せり。河に臨んで美なる哉、水の洋々たる、丘が濟らざる、此れ命なりと嘆じ臨河操を樂曲の名作りて哀しみたり。又葉より蔡に歸らむと爲し、時に渡し場を失なひ、子路を以て田野に耦耕する長沮、桀溺に津を問はしめたり、この二人も亦た隱者なり。津を問ふ者は魯の孔子なることを知り、長沮は冷淡に孔丘ならば津を知らむと答へ、桀溺は子路に教へて曰く滔々者天下皆是也、而誰以易之、且而與其從辟人之士也、豈若從辟世之士哉と種を播きて他を云はず。子路は孔子に二人の言を語りしかば、孔子は憮然として曰く鳥獸不可與同群、吾非斯人之徒、與而誰與、天下有道、丘不與易也。新らしき事にあらざれども、孔子は鳥獸を伴侶として世を避くる人に非ず、斯人斯道は造次顛沛にも胸間より去らざりしなり。天下もし平治せむには變易の用なし、天下道なくむば變易の用あるなり。孔子は楚より聘せられたり、當時晋は西に強く楚は南に於て大なり、鄭、衛、陳、宋、齊に志を得ず、晋も賢良を害し道の行はるゝ國にあらざ、今や楚より使ありて孔子欣然として道に上

りしが陳蔡の大夫に計りて曰く孔子もし楚に用ひられむには陳蔡危しとて、孔子の一行をば野に圍めり、糧食盡き從者は病む、孔子は少しも屈せず講誦絃歌して常のごとし。子路愠り君子亦有窮乎と問ひし時に君子固窮、小人窮斯濫矣の言あり。楚の昭王師を興して孔子を迎へ辛ふじて楚に入るとを得たり、封するに書社七百里を以てせむとす、令尹子西諫めて曰く孔子には諸侯に使節たらしむ可き子貢あり、輔相たる可き顔回あり、三軍を率ふ可き子路あり、政務に達したる宰予あり、以上の諸人の如きは楚國になし、若し孔子に七百里の地を與へたらむには楚の爲に悪しかる可し。文王は豊にあり、武王は鎬に在りて僅に百里の君たれども卒に天下に王たりと。昭王其諫を入れて孔子を用ひず、孔子は亦も楚を去りて衛に歸れり、時に歳六十三中原に足跡の印せざる國なし、僅に北燕と西秦とに赴かざりしのみ。黄河と楊子江との中間の國は盡く用ひられむとを試みたり。周敬王三十六年の魯哀公十一年、季康子に迎へられて魯に歸れり、夫人上官氏は既に世を逝り、孔子齡六十八、魯を去りてより十四年なりとぞ。丘陵の歌あり以て大聖の威を知ることを得べし。

「登彼丘陵、崩其坂、仁道在邇、求之若遠、遂迷不復、自嬰屯蹇、喟然四顧、題彼泰山、鬱確其高、梁甫四連、枳棘充路、陟之無繚、將伐無柯、患滋蔓延、惟以永嘆、涕泪潺湲、魯は復た孔子を用ふること

能はず。孔子も仕を求めず、弟子に禮樂を教へ書を序し禮記に傳し、詩を刪り、樂を正くし易の象、象、繫、說、卦、文言を序せり、當時弟子の數三千人六藝に通せし者七十二人ありき。今や孔子は間居の身となりしが如しと雖も、易を愛讀し韋編三たび絶ち假我數年以學易可、以無大過矣との言あるを以ても、明窓淨几の功は東西に周遊せし時に譲らず。孔子は吏とあり相となり師賓となり、終に學者の生活に入れり。

第五章

詩書を序刪せし時より世を逝るに至る並に孟子と七十二弟子の小傳

孔子は老て益々禮樂に力を盡し、弟子を教へ身は魯國に住すと雖も天下仰望せざる者なし。況んや弟子の諸國の君に仕へて既に名聲の噴々たるあり、衰周に繼ぎて秦王となりしなり。顔淵も喟然として歎じて曰く、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後。と。弟子を養ひしは當時に於て爲しゝなる可し。魯哀公十四年の春に公大野に狩りする事ありき。叔孫氏が車子の鉏商と云ふ者奇獸を獲たり、孔子之を視て麟なるとを知り、麟は仁獸なり、出で、死す吾が道窮す、嘆息して曰く、河不出圖、雉不出書、吾已矣夫と。孔子其頃より魯の史記によりて春秋に手を下し上は魯隱公より下は哀公十四年に至る史を作れり、筆

す可きは筆し削る可きは削り、一字を以て當世を細し褒貶の義をあらはし天下の乱臣賊子を戒めたり、春秋は孔子一代の大作、大義名分は孔子の唱道する所なり、宜なる哉、孔子も後世知、丘者以春秋而罪、丘亦以春秋と云ひしこと。當時顔淵は夙く世を去り、子路は衛に於て戰死し、蕭々の感なきに非ず。周敬王四十一年魯哀公十六年四月孔子病む、子貢來りて病を問ひし時、孔子は杖を負ひ門に道遙せり、子貢の來るを見て賜、子貢の名、汝來何其晚也と、なづかしく思ひしならむ。歎じ歌ひて曰く、太山壞乎、梁柱摧乎、哲人萎乎。涕を流し子貢に語りて曰く、天下無道久矣、莫能宗予、夏人殯於東階、周人於西階、殷人兩柱間、昨暮予夢坐奠兩柱之間、予始般人也と。孔子の夢は識となり七日の後に卒せり。年七十三、四月巳丑の日なり。弟子等は集り來りて夏殷周三代の禮を以て魯城北泗水上に葬れり。家語に由れば

「舎以蔬米三具、襲衣十有一、稱加朝服一、冠章甫之冠、珮象環徑五寸而緝組綬、桐棺四寸、柏棺五寸、飾、牆置、設披、周也、設崇、殷也、綢練、設旆、夏也。」

かく堂々たる儀式を具へて埋葬し、封して偃斧の形と爲し高四尺松柏を樹るを志と爲す、弟子皆な墓に家して心喪の禮を行ひ、三年の喪畢りて或人は留り或人は去りしが、子貢のみは墓に廬して住すること六年なりき。以後弟子の墓邊に住する者多く、孔里と稱して

儒

子孫後世に至るまで絶えず、餘德千載の下に榮むたり。後に廟を建て孔子の衣冠琴車書を藏し漢に至るまで二百餘年間絶えず、漢高皇帝は自ら太牢を以て祠れり、以後歷朝の君臣聖廟を祀らざるなし。

孔子は支那人を教へ、支那は孔子を出だせしなり、歐洲人は評して曰く蒙古人種の志意は頗る冷淡にして思想淺近なり、事物を深く研窮することを好まず、熱情を戒しめ血氣を禁ず、故に來世の問題の如きは措きて問はず、實際的道德の外は求むることなしと。歐人の評は歐人の眼を以て観ることゆゑ、冷淡の裏に潜める熱火、淺近裏に包める高遠は到底縁眼兒の視察の能ふ所に非ず。孔子の一代を心を潜めて味はゞ蒙古人種の理想も觀念も知ることを得べし。然しながら支那人が(特に儒教に養成せられたる者が)印度人、亞刺比亞人、希臘人、羅馬人、英佛、獨魯米の諸國人にかはりし特色、特性ありて、冷淡淺近等の評を受くる傾向のなきに非ず。實は孔子も亦其中の一人なる可し。

明高祖が國子祭酒孔克堅(孔子の末裔なり)を遣して、宣聖(文宣王は孔子の諡號なり)を祀らしむ。御製の詩あり以て歷代尊敬の厚を證す可し。

「孔氏曾孫祭祖回、但言農務野荒開、我知蓋世民容喜、必解春風每歲來、」孔子一代の事は釋尊或は基督よりも簡易明白なりと雖も、支那史家の手になりし完全な

教

る年表なし、次に掲ぐる先聖歷聘紀年は史記の孔子世家とは相違せし點なきに非ずと雖も、史記とても編年的に記載せしものならず、容易に確實の表は製し難し。聊か參考の爲に掲ぐ。

儒

教

- 一歳 至三十歳在魯。
- 三歳 父叔梁紇卒。
- 十九歳 娶宋开官氏。
- 二十歳 爲乘田吏。
- 二十一歳 生子魯昭公以二鯉魚賜之。
- 二十四歳 母顏氏卒。
- 二十七歳 適鄭。
- 二十九歳 適晉學鼓琴。
- 三十四歳 適周問禮於老聃、訪樂於苾弘、反魯。
- 四十二歳 反魯留十年。
- 五十一歳 爲中都宰。
- 五十二歳 爲司空又爲大司寇。

唐玄宗詔追諡文宣王仍出王者袞冕々服以衣之御製の宣聖贊ありき。

○孟子

五十六歳

攝行相事與問國政三月而魯大治齊歸女樂桓子受之郊又不致勝組於大夫遂通

五十七歳

自鄭適陳留三年。

五十九歳

適衛去適晉反河復反衛如陳留一年。

六十一歳

自陳適蔡。

六十二歳

自蔡如葉去葉反蔡。

六十三歳

留陳之間楚昭王使人聘之陳蔡大夫發徒圍之絕糧而適楚昭王將用之子西不可又反衛

六十四歳

在衛留三年。

六十六歳

夫人开官氏卒。

六十八歳

魯以聘迎孔子孔子自衛反魯遂不仕乃序書傳禮記刪詩正樂贊易修春秋。

六十九歳

子伯魚卒。

七十一歳

感獲麟而春秋絕筆。

七十三歳

十六年壬戌四月己丑卒葬於魯城北泗水上弟子皆服心喪三年而去唯子貢廬於冢上凡六年然後去。

孟子名は軻騶人なり。騶は本の邾國にて魯に屬す。當時既に戰國七雄の世となり魯は齊に併せられぬ。業を子思の門人より受け道既に通じ齊の宣王に游事すとは史記の文なり。其祖は魯の孟孫氏なりと云ふ魯の名族なり。聖人の道を以て宣王に説きたりと雖も用ひられず梁惠王に教ふる所ありしが迂濶なりとして用ひられず孟子も亦た孔子と同じく世に適せず遂に志を伸ぶること能はず弟子萬章等と詩書を序し孔子の道を述べ孟子七篇を作れり。孟子の事跡は史に詳かならず其教は七篇に於て知る可し孟子も亦た宋朝に至りて特に世に崇尊せられたるなり。孟子の時は秦に商鞅あり楚魏に吳起あり齊に孫子田忌ありかの合従連衡の最中なれば論法もおのづから攻伐的の英氣圭角あり斯道には害もわりしと云ふ可しと雖も邪路を開き正道を起し大經大法の亡滅を救ひ煖爛を收しはこの英氣ありしに由る可し。

○弟子

弟子蓋三千焉身通六藝者七十二人と史記にあれど業を受け身通する者は七十七人ありしと云ふ史記と家語に異同あり

孔門の十哲は德行に顔淵閔子騫冉伯牛仲弓政事には冉有季路言語には宰我子貢文學に子游子夏の本文あり以て孔門の盛を窺ふ可きなり。

顔回

魯の人なり、字は子淵と稱す。孔子より若きこと三十歳なれど、齡二十九より頭髮皆な白く、三十一にて早世せり。孔子が不幸短命に死す今や亡しと哭せしは此人なり。程子は顔子聖人を去る只だ毫髮の間のみと評せり。

○関子雋

名は横魯人なり。季氏召して費の宰たらしめむと爲しが、辭して仕へず、孝を稱せらる。孔子より十五歳若し。

冉伯牛

字は耕と稱す、惡疾あり、孔子牖より手を執り命也夫、斯人也而有斯疾命也夫と歎せしことあり。

冉仲弓

名は雍、伯牛の宗族なり。父は不肖の人なりしが、仲弓は德行あり威儀あり人君の度量ありしにぞ、孔子は評して犁牛之子、騂且角、雖欲勿用、山川其舍諸と曰へり。父は不善なりと雖も子は美なるを云ふ。

宰予

字は子我、魯人あり。辯才を以て聞ゆ、孔子が子我の晝寢したる時、朽木不可雕也、糞土之牆不可汚也と戒しめられたることあり。齊に仕へて亂を爲せしと云ふ説われど誤りなりとぞ。

子貢

姓は端木、名は賜、字は子貢。衛人なり、孔子より三十一歳若し、宰予と同じく辯才の譽あり、家に千金の富を有す、孔子も瑚璉と評せし人なり。魯衛に相となり、齊に死せり。

再求

字は子有、この人も仲弓の宗族なり。孔子よりわかきこと二十九歳。魯の季氏に仕へて政事に名あり。頗る謙讓の人なりしと云ふ。

子路

姓は仲名は由、又は季路と稱す。魯の卞の人なり、孔子より九歳の弟なり。子路の勇は人の知る所なり。政事にも名ありしが、果烈剛直の聞尤も高し。衛の大夫となりしが、國難の爲に死す。孔子も自吾有由而惡言不入於耳と云ひしことあり、勇ありし人なりき。

子游

姓は言、名は偃、孔子より三十五歳若し。魯人なり。或は吳人にして孔子より四十五歳わ

教

儒

かしと云ふ説あり武城の宰となる。

子夏

姓は卜名は商衛人なり。孔子より四十四歳わかし。文學に名あり頗る精密なる事を好み一字一句も明かに記憶す。孔子の死後西河に住して教授せり。魏の文侯の師となりたり。其子死し哭して明を失す。

子張

姓は顯孫名は師陳人なり。孔子より四十八歳わかし。

曾參

字は子輿魯の南武城人。孔子より四十六歳わかし孝を以て名あり。

子羽

姓は澹臺名は滅明武城の人なり。孔子より若きこと四十九歳容貌はわがらざりしが行頗る正しく行不由徑。孔子も吾以言取人失之宰予以貌取人失之子羽の歎あり。

子羔

姓は高名は柴齊人なり。孔子より若く四十歳孝を以て聞ゆ。

子賤

姓は宓名は不齊魯人なり。孔子より若く四十九歳なり。單文の宰となる。

樊須

字は子遲姓は樊なり魯人にして孔子より若きこと四十六歳孔子に稼圃の事を問ひ吾不知老農吾不知稼圃の言ありし人なり。

子有

姓は有名は若魯人なり。孔子より若きこと三十六歳強識にして古道を好む。

公西赤

字は子華魯人なり孔子より四十二歳わかし。

原憲

字は子思宋人なり。孔子よりわかきこと三十六歳。貧しふして道を楽しみ孔子の家宰となり後に衛に隠退す。

公冶長

字は子長魯人なり。孔子が雖在累繼之中非其罪也以其子妻之と云ひしは此人なり。

南宮縚

南宮は姓なり字は子容。孔子兄の子を以て妻となさしめたり。名の縚を史記には拾と

爲せり。

公哲哀

公哲は姓なり、字は季沈。孔子も節を人臣に屈せざることを歎賞せし人なり。人臣とは大

曾點

夫をさしゝなり。  
名の點を史記には箴に作る同音なり。弟子各々其意を云ひし時に春服既成、冠者五六人、童子六七十人浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸、と云ひし人なり。孔門中に特色ありし者なり。

顔由

顔回の父なり。由或は無繇に作る、字は季路。顔回より後に死す、孔子より六歳わかし。

商瞿

字は子木、孔子より二十九歳わかし。易を孔子より學びし人なり。漢に至るまで易の傳統は傳はりたり。

漆雕開

漆雕は姓、開は名あり。字は子若。蔡人にて孔子より若きこと十一歳。尙書を學びて仕ふることを好まず。孔子が子が齒は仕ふ可し時過んとすと注意を與へしに、吾斯之未能

信と答へ尙書を學習せし人なり。

公良孺

字は子正。陳人なり。

秦商

字は丕茲。魯人なり。孔子の父とゝも腕力あるを以て聞えし人なり。

顔刻

字は子驕。魯人なり。

司馬犁耕

字は子牛。宋人なり。

巫馬施

字は子期。陳人なり。

梁鱣

字は叔魚。齊人なり。

琴牢

字は子開。衛人なり。(史記には缺く)

冉孺

字は子魯。魯人なり。

顏幸

字は子柳。魯人なり。

曹邴

字は子循。衛人あり。

公孫龍

字は子石。

伯虔

字は子哲。魯人なり。

秦祖

字は子南。

叔仲會

字は子期。

顏之僕	樂欣	申續	施之常。	邾選	石作蜀	步叔乘	句井疆。	公夏守	燕伋	漆彫從	秦非	公肩定	原抗	顏哈
字は子叔。	字は子聲。	字は子周。		字は子斂。	字は子明。	字は子車。		字は子乘。	字は子思。	字は子文。	字は子之。	字は子仲。	字は子籍。	字は子聲。

榮祈	任不齊	商澤	狄黑	左郢	縣亶	石處	薛邦	冉季	穰駟赤	宰父黑	公西與	廉紫	公祖茲	奚箴
字は子祺。	字は子選。	字は子秀。	字は哲之。	字は子行。	字は子象。	字は里之。	字は子從。	字は子產。	字は子從。	字は子黑。	字は子上。	字は子曹。	字は子之。	字は子楷。



孔 弗 字は子蔑。 孔子の兄の子なり。

漆雕修 字は子斂。

縣 成 字は子橫。

顏 相 字は子襄。

計七十四人

この他に公伯寮、秦再鄰、單、顔何の四人あれど、先儒に説あり。

### 第六章 教 義

程子曰く願十七八より論語を読み、當時已に文義を曉る、之を讀むこと愈々久しく、但だ意味の深長なるを覺ゆと。我が士人の教育も明治以前は十五六にして既に論語若しくは、四書五經の素讀は了り、漢學を修めむと爲す者は、更に進みて講義を聽き講義を爲し文選或は八家文、文章軌範等を讀み、史記漢書等にわたれり、傍ら詩を作り文を帥するあり。然れど讀書を好まず或は必要のなき地位ならむには三字經、四書等を了り、他には及ばざりき。學風斯くの如くなれども、君爲臣綱。父爲子綱。夫爲妻綱。即ち君臣義、父子親、夫婦順の三綱と、父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友の五倫、又は仁、義、禮、智、信の五常を知らざる者はなし。

假令倫常の名目は知らずとも忠孝仁義の重きは知りしなり。社會の道德は士農工商ともに儒教に由りて維持せられしなり。僻村にても御寺様は來世の禍福を教しへ、御師匠様は現世の道德を説き、南無阿彌陀佛の稱名は來世の苦難を脱し。忠孝の二字は道德の鐵案と信じたり。二十四孝、四十七士は實に近世日本人の理想的人物なり、軒端にむらがり、鳴く、蚊柱にも、臺所に置ける、筈にも、孝子の昔を、忍び、田舎芝居の、忠臣藏は、儒者の、講義より、力あかりしなり。儒教の家庭に感化を與へしことも大なりと云ふ可し。然しながら儒教由來難解錯雜の教義に非ず、總論にも述べし如く神又は天に關しては孔子は新たに教へしことなく寧ろ靈界の問題は避けしが如し、故に來世の賞罰或は靈魂に關したる解説は更になし、易經は深遠なる理を教ふると雖も、周易の妙を味ふものは儒者すらも僅少なる者なり、詩經は古文學者の几に置かれ、禮記は殆んど空文、春秋は史論なれば直接には普通道德に影響せず、書經は文章家の讀む可きものとなり、孟子さへも政治上の問題頗る多くして應用には稀なり、證は大學、中庸、論語を以て儒教は人に知られ、人も儒教を知りしなり。故に教義を説くも煩瑣なる別を立てず其大要を茲に記載し、末に朱子派の學説を擧げむ、以て儒教の大體を了す可し。

夫れ天の人を世に生せしむるや、必ず仁義禮智の本性を與へしなり、然れど人には種々様

々の氣質ありて賢愚あれば決して一樣ならず。故に聰明睿知なる人ありて、天は其人に命じて億兆の君師と爲して庶民を治めしむるなり。康誥に曰く克明德、大甲に曰く顧諟天明、帝典に曰く克明峻德などありて、自明の大切なることを教しふるは、人に仁義禮智の本性ありと爲せばあり。堯が舜に授けし箴は人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執厥中と云ひしも、人心道心の異ありて、天理も人欲の爲に蔽はれ本心の正を得ず、過不及の事のみ多ければ人には氣質の差ありと論するなり。本性は天賦なれども、人は其本性に全く従ふ者も極めて少なく、全く反對する輩のみなれば、天は先覺を以て衆民を教しへ給ふ、其先覺者が聖賢と云へるなり。大哉聖人之道、洋洋乎發育萬物、峻極于天、又は仲尼祖述堯舜、憲章文武と云ひ天下の大經を經綸し天下の大本を立つるとも云ふなり。仁義禮智之性。氣質之稟。億兆之君師と云ふことを記憶す可し。斯く仁義の本性も氣質の稟によりて、頗る微にして危し、伏羲、神農、黃帝、堯、舜、禹、湯、文武などと云ふ聖賢は天に繼ぎ極を立てしなり、三代の治は都鄙みな學あらざるとなく、貴賤みな八歳より小學に入り灑掃應對禮樂射御書數を教しへられ、十有五より大學に入り窮理正心脩己治人の道を學ぶ。あく三代の昔は文化の上下に隆ひなりしと云ふ、周暨於二代、郁々乎文哉、吾從周。又は述而不作、信而好古、竊比於我老彭と孔子も云ひしは聖賢が君師の

位を得て政教の行なはれしを慕ひしなり。

爲政以德譬如北辰居其所而衆星共之。

道之以政齊之以刑民免而無恥道之以德齊之以禮有恥且格。

行夏之時乘殷之輅服周之冕樂則韶舞放鄭聲遠佞人鄭聲淫佞人殆。

論語に以上の語あるを以ても、三代の治を理想とし名君賢相ありて、大小學の教育を施し

政教政治道德一致して治國平天下を目的と爲せしなり。

灑掃應對禮樂射御。修己治人は儒教の旨とすることを知る可し。

次第節目ありて教を爲し、民生日用彝倫に適し人性を知り職分の爲す可きを知り、記誦詞章は功ありとても小學の灑掃應對禮樂射御より重むせず。虚無寂滅は高しと雖も大學の窮理正心脩己治人より尊からず、況んや權謀術數をや、茲に於て浮屠氏の教、老莊の説は斥けられ孫吳揚墨申韓の徒は齒せられず。

大學の教しふる所は左の如し。

明德。新民。至善。本末。誠意。正心。脩身。齊家。治國。平天下。

明德とは自己の徳を明かになし、新民は其心を洗ひ其身を沐浴し舊染の汚を滌ひし者をさすなり。至善本末とは君は仁、臣は忠、子は孝、父は慈、友は信とそれ〴〵に大切なる所に

心力を盡す可き目的即ち至善なり。己の心鏡に一點の曇なければ何人をも畏敬せしむ可し是即ち本末なり。誠意正心修身とは先づ第一に其意を誠になせば富が一家内を潤して安らかならしむるが如く徳は身心を樂ましむるあり慎獨誠意の教は茲に在り。第二に喜怒哀樂の情欲のみ動かしむる時は言行の正鵠を失するものなり故に正心修身の必要あり。第三に人は私情に偏し私欲に僻えて過失に陥りやすきものなれば身を修め、一身修まらば長幼の序父子の道夫婦別等の教を以て其家を齊ふ可し一國の治亂盛衰は一家の齊ふと齊はざるに在り宜兄宜弟宜兄宜弟而后可以教國人と云へる詩ある所以なり齊家治國の道は茲に在りて存す。最後に進みて平天下の法は賢を親み利を樂しみ各々其所を得るを説けり。以上の教を以て儒教の綱領と知る可し。次に中庸は如何ん。道之本原。存養省察。聖神功化。中庸。智仁勇。天道。人道等なり。

中庸は子思孔子の孫子が道學の傳を失ふを憂ひて作る所なりと云ふ。大學よりは心の虚靈知覺或は人心道心の異などに論及し頗る高遠なるものにして。此書には大聖堯舜禹大賢顔淵子路等の事跡を引き丁寧に告戒せりされど儒教の蘊奥を開示し綱維を提掣せし書なれば沈潜反復するに非ずんば。解し難き書なり。

天命之謂性率性之謂道修道之謂教道也者不可須臾離也可離非道也是故君子戒慎乎其

所不睹恐懼乎其所不聞莫見乎隱莫顯乎微故君子慎其獨也喜怒哀樂之未發謂之中發而皆中節謂之和中也者天下之大本也和也者天下之達道也致中和天地位焉萬物育焉。一篇の體要は是れなりとあるが如く中庸の大意は以上の語に由りて味ふ可きなり。

舜其大知也與舜好問而好察邇言隱惡而揚善執其兩端用其中於民。

回之爲人也擇乎中庸得一善則拳拳服膺而弗失之

子路問強子曰南方之強與北方之強與抑而強與寬柔以教不報無道南方之強也君子居之衽金革死而不厭北方之強也而強者有之。

舜回子路の例を以て智仁勇の一つも廢す可からざることを教しふ。この他に費而隱費は用の廣なり隱は體の微なり。行遠必自邇登高必自卑。達道達德。(達道とは君臣父子夫婦兄弟朋友の交りなり。達德とは智仁勇なり)九經。(修身尊賢親親教大臣體群臣子庶民來百工柔遠人懷諸侯)博學審問慎思明辨篤行等の訓あり。天道人道には「自誠明謂之性自明誠謂之教誠則明矣明則誠矣。」の語あり。即ち聖人は性もと明かにして善を爲し賢人は教に由りて善を爲すなり聖人の道は天道なり賢人の道は人道なり。

論語は孔子が弟子と問答せし語録あり。魯論語二十篇齊論語二十二篇の二種ありしと

雖も今は魯論のみなり、孔氏の壁中より出でしと傳ふ。著者は有子、曾子の門人の手より成る、この書には

「學而爲政、八佾、里仁、公治長、雍也、述而、泰伯、子罕、鄉黨、先進、顏淵、子路、憲問、衛靈公、季氏、陽貨、微子、子張、堯曰、」

の諸篇あり。先づ學而には務本、入道積徳の教あり、學而時習之不亦說乎の冒頭の語は朱注にも人性皆善而覺有先後、後覺者必效先覺之所爲、乃可以明善而復其初也の句あり、大學の條下と照して思ひ半に到らむ。孝悌也者其爲仁之本與。吾日三省吾身爲人謀而不忠乎。與朋友交而不信乎、傳不習乎。慎終追遠。夫子溫良恭儉讓。等の語あり。爲政には孟懿子問、孝曰無違。孟武伯問、孝子曰父母唯其疾之憂。子遊問、孝子曰皆能有養、不敬何以別乎。子夏問、孝子曰色難。等の語あり、孝の如何に爲す可きやを見る可し、子の父に對するは父の仰に従ひ父の病に注意し朝夕の禮にも敬し奉り、父の心を痛めぬやうに柔和なる顔色を爲す可しと云ふあり。八佾は禮樂の事を教し、禮樂を正しふするは孔子教の骨子なり、故に魯の大夫季孫氏が天子の朝廷に於てのみ舞ふ可き八佾と云ふ樂舞を爲せしを見て是可忍也孰不可忍也と怒りしは上下の分を正ふせむと欲せしなり。孔子の生涯は殆ど上下の分を正しふせんが爲に了りしと云ふも過言に非ず、子貢欲去告朔之餼羊

子曰賜也爾愛其羊、我愛其禮と云ひて告朔の禮等は當時魯國にはあらざりしも、祖廟にさゝぐる羊だけでも存じなば告朔の禮と云へるとが在りしと知らるゝゆゑに告朔の餼羊は去るなど教へたるなり、以て孔子が禮樂を存することを重んぜしを知る可し。里仁には里仁爲美、擇不處仁、焉得知とありて住居する所も仁厚の俗ある郷里を擇び、是非の本心をば人情風俗の爲に亂れざらむやうにと訓しへられぬ。曾子曰夫子之道、忠恕而已矣、子曰父母在不遠遊、遊必有方。父母之年、不可不知也、一則以喜、一則以懼などあり。忠は天道なり、恕は人道なり、忠は無妄にして己を盡し、恕は己を推して物に及ぼす仁愛の道なり、口を開けば仁、忠、恕、孝と云ひ、遠遊せず父母の年を知ると云ふ、儒教が忠、孝を教しふるや盡くせり。公治長には人物の賢否を論じ、其事の如何を問はず、公治長と云ふ人獄舎の裏に在りしかと非其罪也、以其子妻之の文あり。罪の有無は我が中に在り、外より至る者は榮辱に非ずと爲し、あり。雍也、雍也、里仁と稍や似たり、賢哉回也、一簞食、一瓢飲、在陋巷、人不堪其憂、回不改其樂、賢哉回也の語あり、亦た内に仁恕を求めて外の利名に關せざるを賞せしなり。述而には謙虚を教し、述而不作の句ある所以なり、又孔子の愛ふる所は徳の脩らざる學の講せざる義を聞きて徙るゐたはざる、不善の改るゐたはざるなりとあり、吾不復夢見周公の句はこの述而にあり、又子以四教、文、行、忠、信と云へるは文を學び、行を修め、以て忠、信の

本を存ずるを云ふ。泰伯には周大王の長子泰伯の至徳をあげて三度天下を譲りて其徳の世に顯れざるを歎賞せしなり。此所は内に求めて外を慕はざりし節操を重んぜられしならん、又た三分天下有其二以服事殷周之徳其可謂至徳也已矣の語あり。子罕は子罕言利與命與仁の句より取りしなり罕はまれの意なり、利は義を害し、命の理は玄奥なり仁の道は大なるが故に罕れに言ひしなりとぞ。此の章には大哉孔子博學而無所成名。又は孔子門弟子と語りて曰く吾何執、執御乎、執射乎、吾執御矣の言あり、御は人僕なれば尤も卑しき職を執ると云はれしなり。郷黨には孔子の容色言動を記載せり、先進にハ弟子の賢否を評し、顔淵、子路、憲問は顔回、子路、原憲と問答多く、衛靈公、季氏、陽貨も同じく此等の人の問答あり。微子には聖賢の出處を記す、子張には弟子の言を記す、堯曰は堯曰咨爾舜天之曆數在爾躬、允執其中、四海困窮天祿永終の語あるが故なり。允執其中の語は實に中庸の神髓あり。以上二十篇に仁、義、禮、智、忠、信、孝、悌の教あり、三綱、三徳、五常、九經盡く具はれり、若し人あり儒教の教義を問はば、先づ大學の明德新民、至善、本末、誠意、正心、脩身、齊家、治國、平天下の綱たることを告げ、中庸の中とは不偏、不倚、無過不及の意と庸とは平常の義なることを述べ、孔門の心法を説き、論語を開き、一々孔子の教を引きて綱常の金言を採り、聖人の品性、弟子の言行を談すれば、儒教の一斑を知りもし知らしめも爲すことを得ん。然しなが

ら治國平天下は孔門の目的、人性の善惡は儒教の由る所なり、孔門の正統を傳へし孟子は以上の説に力あり必ず窺はざるを得ず。韓子も堯は是を以て舜に傳へ、舜は禹に傳へ、禹は湯に傳へ、湯は文武周公に傳へ、文武周公は孔子に傳へ、孔子は孟軻に傳へたりと云ひ、又曰孟氏は醇の醇なる者なりと、孟子は七篇あり、大學中庸論語よりも圭角ありて英氣溢るゝが爲に文章は更に快爽にして千古稀有の大文字あり。特に見る可き點は「存心、養性、收放心、惻隱、羞惡、辭讓、是非」を以て人心を正ふし仁義禮智を論ず、別けて孟子に見る可きは養氣、性善の説なり、茲には二三の言を擧げん。

齊宣王問曰陽放桀、武王伐紂有諸、孟子對曰於傳有之、曰臣弑其君可乎、曰賊仁者謂之賊、賊義者謂之殘、殘賊之人謂之一夫、聞誅一夫紂未聞弑君也。

一夫紂を誅するを聞く、君を弑するを聞かずの一句は千載の下に鏗爾として聳あるを覺ゆ。仁義の彝倫を重しとして、仁を害し、義を害する者は帝王の尊と雖も之を一夫と呼ぶ、實に大道の鐵案ありき。又公孫丑と云ふ人孟子に問ふに心を動さるること告子と異なる所以を尋ねしに

「我善養吾浩然之氣」

と答へしことあり、浩然之氣は孟子も曰難言也とありて大賢の自得せしことなれど、程子は天人一也更不分別浩然之氣乃吾氣也。謝氏は浩然之氣須於心得其正時誠取なき、ありて八面玲瓏たる道義心なる可し。孟子一代の本領は浩然之氣にありて存す。

「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也。」

これを四端と云ふ、人に四肢あるが如しと云ふ、人は皆な此四端あれど物欲の爲に蔽はれて仁義の道に大成せざるなりと教しふ。又淳于髡と問答せし所なと頗る面白し。

「淳于髡曰男女授受不親禮也。孟子曰禮也曰嫂溺則援之以手乎曰嫂溺不援是豺狼也。男女授受不親禮也。嫂溺援之以手者權也。曰今天下溺矣夫子之不援何也曰天下溺援之以道嫂溺援之以手、子欲手援天下乎」

基督教に於ては使徒保羅の人と爲りと其論辨其文章頗る孟子に近し、縦横自在にして手に摩尼寶珠を握るが如し。又曰く

「西子蒙不潔則人皆掩鼻而過之、雖有惡人齊戒沐浴則可以祀上帝。」

自新の道を勸るや力あり。又昏夜に哀を乞ひ白日に人に驕る者を戒しむるや。

「齊人有一妻一妾而處室者其良人出則必饜酒肉而後反、其妻問所與飲食者則盡富貴也其

妻告其妾曰良人出則必饜酒肉而後反、問其與飲食者盡富貴也、而未嘗有顧者來吾將黜良人之所之也、蚤起施從良人之所之、徧國中無與立談者、卒之東郭墦間之祭者乞其餘、不足又顧而之他、此其爲廢足之道也、其妻歸告其妾曰良人者所仰望而終身也、今若此、與其妾訕其良人而相泣於中庭、而良人未之知也、施施從外來、驕其妻妾、由君子觀之、則人之所以求富貴利達者、其妻妾不羞也、而相泣者、幾希矣。」

と説破せり。又性善を論ずるは

「滕文公爲世子將之楚、過宋而見孟子、孟子道性善言必稱堯舜、世子自楚反復見孟子、孟子曰世子疑吾言乎、夫道一而已矣」

又告子と性を論じて曰く

「人性之善也猶水之就下也、人無有不善水無有不下、今夫水搏而躍之、可使過顛激而行之、可使在山、是豈水之性哉、其勢則然也、人之可使爲不善其性亦猶是也。」

孟子が性善を説くや斯くの如し。性は人の天より稟くる所にして全く善なり、堯舜の聖も凡人も違へることなし、差別を生ずるは私欲の爲に蔽はれて中庸を得ず喜怒哀樂の節を失するが故なり、宋儒は性即理也と云ふ説あり、性の本善なりと云へることは孟子の力を極めて論ずる所にして二程子によりて益々發揮せられしなり。

以上を一讀し了らば儒教の教義は解し得らる可きか。  
以下は朱子學の綱領を述ぶ可し。  
道、學、致知、力行、

この四事は朱學の入門の道なり。  
道とは天則なり、天叙、天秩、天命、天討、天理と種々の名稱ありと雖も、天則の異名のみ、極至、善も同じ意義なり。故に君臣、父子の道即天則なり、視るにも聽くにも待つにも行にも人倫事物に天則あり、小は一身一家、大は四海萬邦に至るまで天則に支配せらるゝなり、これを人道と云ふ、人道は人生の固有なりと云へり。大學の明德、中庸の性もこの道なりと知る可し。

學とは聖人の教なり、父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信と云ふ書の五典及び知仁聖義忠和。孝友睦婣任恤。禮樂射御書數の周禮の三物等に由りて人性の本に復さしむるが學なり、教なり、復性<sup>レ</sup>と云ふは朱子學の唱ふる所にて、其學習の方は博文約禮<sup>博學</sup>於文而不約之以禮必至於汗漫<sup>レ</sup>に由り是非を分ち邪正を辨じて人欲を去り氣質を變するなり、之を致知と云ふ。論孟の教ふる所も茲に在り。  
致知とは智識を極むる事なれど、一般の學藝に非ず、父母兄長等を敬親する道なり。致

知は物に格る事を勤むるあり。格物とは修己、理人の二大綱によつて道德、政治の天則を極むるとなり、これを窮理と稱す。天下の政治も家族のおさめ方も何も彼も致知格物理を窮めて處す。故に博學、審思、明辨、篤行の必要あり。又子夏の言に博學而篤志、切問而近思と云へることあり、聖人の書を讀み義を講じ心を一ト筋になして他念なく、何事も他人のこと、思はず己が身に於て、切に問ひ近く思ふなり、かく修行をつみ來れば一旦豁然として貫通し、天下の理通せざることなきに至るなり。

力行とは格物致知の方により理を窮め豁然と貫通せし後は其道に従ひて行ふ可きなり、この力行に居敬、省察を以て存養の道に心を盡し、知行一致して徳を修め仁を爲す可きなり。行住座臥肅々として敬恭を失なはず、禮儀正しく忠信に事を執るが居敬なり、座禪入定とは違へども大小の事皆な深思熟慮するは云ふまでもなく、獨を慎みて心より惡を惡むことは如惡惡臭、善を善みすることは如好好色と云ふ本文の如くに可きなり。  
この致知力行につき難あり。人倫を明かにして事足る可し、天下國家の上までに論ずるは何ぞやと。されど一身一家の倫常のみならず、其地位其職分に應じ大臣とならば君主を輔佐し奉り、縣吏とならば庶民を能く治め、一身より天下に至り天地間萬事萬物遺す所なく窮め盡すが致知力行の本旨なり。故に朱子の言に

「天下更有大江大河不可守、個土窟子謂水專在此」と告げしことあり、以て朱子は日用倫常の小成に安んぜず、理國平天下を目的となし、なり。道學もとより何人にも理國平天下の大事に關せよと云へるには非ず、洒掃應對の禮より君父尊長に事ふる道を急務と爲せども、天地鬼神郊社宗廟幽明死生の道をも知り、理國平天下の教を講ずるは大目的なりと知る可し。こは朱子學のみならず、儒教の目的なれど、二程子以後の道學者によりて頗る高遠に馳せし跡なきに非ず。朱子學を修めむと欲する人は左の順序によりて書を讀み門に入る可し。

- (一)小學。
- (二)大學。
- (三)論語。
- (四)孟子。
- (五)中庸。
- (六)五經。
- (七)近思錄。

註解の書は四書集註、大學或問、詩集傳、易本義等なり。

詩は遊戯三昧と視て深く論せず、其志を述ぶるまでなりと爲すなり、こは古今東西哲學者の見識なれば朱門のみにもあらじ。文は達意を旨となすなり。朱子派の學説は斯くの如し。世人や、もすれば陽明派を陽儒陰佛と謂れども、もし陽明學が儒と禪宗ならむには、朱子學は儒と天台宗の教義を混同せしと云ふも可なり。儒教も宋に至りて昔日の儒教に非ず。

されど儒教に於て朱子派は殆んど正統的地位を占む、清朝の初には朱陸正邪の争あり

しと雖も陸は終に朱に勝たず、我が朝に於ては前にも云ひし如く、徳川氏の二百年間は朱子學のみなりき。されど他の學派にも傑出せし人物のなきには非ず、人物の品位より論ずれば量は少なしと雖も、古義學の仁齋及其門下と古文辭學の徂徠及其門下、陽明學の藤樹、蕃山等は國史上に稀有の大家なりき。

仁齋は天地は氣のみ、氣とは心なり、この氣の外に別に理なしと論じて、朱學の理即天則を排せしなり、其説の因る所は吳蘇原より出で陽明に近し。

徂徠は禮樂を専ら説き、道と云ふは聖人が天下を理めむが爲に設けし法なれば、今時の掟の如し、六經とは御成敗式目の如き者なりと説破せり、一言に約すれば堯舜禹湯文武などと云へど、實は漢唐宋などの開國の祖と同じ、されど其徳其智の勝れし人ゆゑ、當時に立てし道徳政治の法律が後世の道とありしなりとす。故に經濟の道は朱子門の人よりも抜け出でたる卓識ありしなり、從て詩文にも力を用ひぬ。

藤樹、蕃山は心學と稱し、純然たる陽明學なり、理も氣も禮樂をも論せず、本心を知るを以て第一義と爲せり、殆んど禪宗と同一なる所多し、六經は注脚となし、經義には拘泥せず、主一無適廓然大公一仁を求むるに在り。陽明學を知らむと欲せば、王陽明全書或は傳習錄、明儒學案、孝經彙註、大學劄目等を讀みて知る可し。



世界三大宗教 終

附録

○回々教

回々教は亞刺比亞國メデナより起りしなり。始祖をマホメットと稱す。回教は支那の呼稱にして正しくはマホメット教或はイスラムと稱す可し。今の土耳其帝國ハマホメットの血統には非ずと雖も、政教を一致せしめ助す可からざる國礎を該教の上に置けり。(基督紀元七百年の頃文武の朝なり)カリフの征服せし地は土耳其支丹、波斯、亞刺比亞、埃及、トリポリ、アルヂリヤ、モロッコ、西班牙、伊太利群島に亘れり。(カリフとは回教の教主なり)即チサラセン帝國なり。今日は西班牙、伊太利群島、土耳其支丹、波斯等の諸國は獨立して年久しと雖も、之に易ふるに小亞細亞地方、希臘、ローマニアを併せ一時歐洲人の肝膽を塞からしめしは史上に灼然たる事實なり。其帝國は始祖マホメットの没後數代の「カリフ」ありて一時旺盛を極め後に突厥人の爲に政教ともに其權力を奪はれたりと雖もマホメットが宗教的の勢威感化の力は毫も減せず、否、寧ろ其教勢を一振し以上の征服せし諸邦中歐洲の南部は全く基督教に屬したりと雖も、亞弗利加は益々内地に進み、かのナイルの河

源ウイクトリア、ニアンズアの奥に達し北部は全く回教に屬し森爾たる黒蠻をして一神あることを知らしめぬ。又蒙古部落、印度内地、支那の雲南、貴州、滿州、南洋のボルネオ、スマトラ、ジャワに至るまで弘教せしは世界三大宗教の一ツと仰がるゝに足りなん、恐らくは弘通傳教の力は基督教に譲ると雖も、佛教の上に在りと云ふ可し、たゞ惜しむらくは宗教の教義深遠ならず道徳もまた高からず爲に未開の地方には傳播すると雖も、歐米の諸國には入ること能はず、支那、印度に於てさへ勢力の見るべきもの少くなし。我が國には未だマホメットの名も、コーラン經卷の名の句も口になす者なし。然れども臺灣は新に版圖に入り遼東は一時占領せられたり、豈に回教を對岸の火と看る可きものならんや。

### 摩哈默多

マホメットの名は英語にて

“Muhammad,” “Mohammed,” “Mohamad,”

と綴りムハムマド、モハムマド、モハムマドと發音すれど、Mahomet、マホメットを以て穩當なりとす(ラクノー、ラ、マルチニー學校の教頭ストーバルトの説なり)マホメットは基督紀元五百七十年の秋アラビヤのメツカの東にあたるアブ、コベイス山の麓にて生れたり。父をアブダラー、母をアミナと稱す。家頗る貧しく或時父アブダラーは隊商と共に南スリヤの邊へ赴きしが、これぞ一世の別とはなりぬ。未だ新婚の席さへも冷やかならざる新婦アミナは夫が旅に病みて死せしと聞き愁歎は云ふもさらなり、前途如何にして世を送らむと思ひ、其遺産はと問へば駱駝四頭、野羊一群、バラカと云へる女奴あるのみ。マホメットは實にこの不幸の中に生れしなりき。他の宗祖と同じく誕生の日に祥瑞の傳説なきに非ず、大氣震動し、火教の聖火燃え、群鬼空中に悲鳴したりと云ふ。國風に從ひ保育の任を乳母ハリマに托し母に離れて山間の地に住したり。亞刺比亞の地は長ツ千四百里幅八百里の一大國なり、されど此國は亞弗利加の沙漠と同じ地質あれば國中に航通す

可き河流なく内地の事は茫として古今同一の蠻狀あり。たゞ沿岸一帯の地のみは頗る  
 奇腹にして爽快なる綠樹茂草殆んど樂園の觀あり、加るに摩天の花剛石層よりなりし禿  
 山元として大空に聳え天下の大觀を茲に集め來りしものゝ如し、大風起れば塵砂雲のご  
 とく咫尺をだに辨せざるが如き事ありと雖も、寧靜の日にあたりては晴空鏡を磨せしが  
 如く朗々として一塵をだにゆるさず、空氣の純清なること譬ふるに比なし。この國は他  
 に屬せしことありと雖も、其實は版圖に加へしと云へるのみにして海岸一部の地を除け  
 ば亞刺比亞は依然たる太古葛天の民にて曠漠たる千里の原野に自由の空氣を吸ふ者な  
 り。マホメットはかゝる原野に生長せしなり、後日渠が冲天の氣象も素因なきに非ず。  
 渠は二歳の時に母の家に歸りしがメツカは衛生に可ならずと再び山間の地に送られた  
 り。齡五年に達せし時癩痢に罹り、乳母の驚き一ト方ならず正しく渠は惡鬼に憑られし  
 者と思ひ其看護を辭せり、當時より母の家に戻りしが不幸兒なる哉、マホメットは六歳の  
 時に母を喪しなひ、今は忠誠なる女奴バラカのあるのみ、この女に慰さめられてメツカ  
 にある祖父アブ、ダリブの家に養なはれ、祖父死して後は其子アブ、ダリブが愛情  
 濃やかに己が子として養ひたり。  
 マホメットは十二歳に達せし時アブ、ダリブの許受を受け隊商に従ひて北方に旅行せり、

この行は渠を益せしこと尤も大なりき。籠鳥の放たれしが如く、日々に變化する景色夜  
 々に焚く篝火の光、旅中の珍談奇説は例のアラビヤ的の奇異なる神仙鬼差の談話なれば、  
 さなきだに憂鬱に沈む傾向ある渠が心に染みしことは如何ばかりぞや、況んやこの旅中  
 に父母の墳墓を訪ひ懷舊の涙を墓前の草にそゞしは渠が終生忘るゝ能はざる事のみ  
 なりき。特に摩西が神より十誡を授かりしと云へるサイナイ山の邊をよぎり、この一行  
 中には基督教徒も多くあり、旅行せしシリヤ地方は殆んど皆な基督教の信者なり、當時は  
 マホメットに如何なる感をや興し來りし。回教徒の中に於ては今も教祖が當日の旅行  
 に種々の奇瑞ありしと傳へ、天使は其翼を擴げてマホメットを覆ひしことありと云ふ。  
 齡二十の時に宗教上の戦争あり、コレイシ族とベニハウヅイン族との間に起れり、渠は  
 其時かの太閤王の如く山間に羊を牧し沈思冥想を事とし他より篤信者と呼ばれ居れり、  
 此戦には叔父と共に戰場にのぞみ弓を執りしとぞ。廿五歳の時に叔父アブ、ダリブの勸  
 によりメツカの富人の寡婦カデイヤの家に仕へたり、此時を以てマホメットが生涯の一  
 段落と爲す可し。この富家の爲に渠は隊商を率ひてシリヤ地方ニ貿易し商業頗る功を  
 奏せり家主カデイヤはマホメットが智畧あるに感じ又其風采の心を動すありて終に揚  
 げて己れの夫と爲し膠漆の情濃かにして二男四女を悦びぬ。後日亞刺比亞全國の人心

を支配せし如く先づ寡婦カデイヤの心を獲たり。渠が地位は既に牧杖を手にする賤者ならず、メッカに於ては屈指す可き紳士の一ツとはなりぬ。

餘裕あれば静閑を生ず、宗教に熱心にして想像力に富めるマホメットは人烟を離れし山野を逍遙し或は山陰の洞窟に坐し、終には日夜恍惚として幻境に入りぬ。人は渠を異端を修むる者となしたれど、妻カデイヤは神の使徒なりと先づ第一に信仰したり。マホメットは基督教及び猶太教の教理に通せざりしが、妻の従姉妹にワラカと稱する基督教徒あり、はゞ基督、猶太の兩教の義に通じたり、此女よりして、ミシナ、タルマッド等の遺傳説を聞き、其他養子のズゼイド又は妻の従兄弟オスマンより基督教を學びしと云ふ。當時渠はヒラの洞窟に入りて亦もや冥想沈思を専らに爲し殆んど靈に憑れし人の如し。渠は幼時の病癩癩を屢次發せり、この洞窟は長サ四ヤルド幅は一ヤルドより三ヤルドに達せり、かゝる窟中に日夜坐して祈禱を爲しをり、癩癩を起し夢幻の境に心を遊ばせ飄然として夜遊す、鬼に憑れしか神と遊ぶか到底尋常一様の觀に非ず。渠が幻境は實相となり夢現の差別あらず、或時シユベイル山の絶壁より身を投じて自殺せんと欲せしに天より聲ありて留められたり、渠は此聲を以て神の聲と信じ己れも亦た預言者の一人に召されたる者と信せり。茲に於てか自國の宗教の腐敗を一洗し、彙祖 アブラハムが奉せし一

神教の光輝を明らかに爲さむと心を決せり。

マホメットは斯く宗教に熱衷すると雖も、未だ尋常の職業は抛たず、寧ろ貿易に力を盡し家庭に於ても郷黨に對しても頗る愛憐の情厚く敬崇せられたりとぞ。

四十歳になりし時ヒラの洞窟にありしが天使、ガブリエル下り來り天に渠を伴なひ絹に字を書せしものを携さへ、渠に讀めと命ず、讀むこと能はず、時に天使は教しへたり、曰く、萬物を造りし主の名によりて讀め。ペンの用法を教しへ知らざることを人に教ふる恩惠の厚き主によりて讀め。コラン經九十六スラ一節より五節、天使は上りたり、マホメットは其絹に書せし教訓を一字一句も忘却せず、恰も心肝に刻みしが如し。時は、ラマーダンの「アル、カドル」の夜なり、ラマーダンは回教曆第九月に當る、この天使の告げありたれど、信偽に惑ひし時に靈鬼の爲に欺かれんと爲し山上より身を墜さむと考へしとあり。前にも云へるが如く時に聲あり、オー、マホメットよ、爾は神の使徒なり、我は、ガブリエルなりとの告により今は胸中一點の疑心もなく、喜悅してこの神勅を先づ妻に告げしが、カデイヤも信じ、ワラカも信じ、ズゼイドも信じ、アリもアブ、ベクルも信じたり、以上は皆な渠の従兄弟或は養子なりき。此等の親戚よりして次第にマホメットを信する者を生じ、此歳の末より公然と宣教に従ひたり、これを第二段落と爲す可し。後の十年間に信者は益々加

はり來りしと雖も多くは下等社會の勞働人に多かりき、マホメットの新教に抵抗する者も少なからざりしが、特に叔父ワリド、並にアブラハブ等は烈敷抗撃し亂打して辱しめしとさへあり、然るに他の一人の叔父ハムザは新教を喜んで受け後の數年間マホメットを助けて戦ひし人なり、又他には幼時より養育されたるアブラブあり、渠は新教を受けずと雖も、マホメットを助くることに力を盡し實に外護の恩人と云ふ可きなり。されど國中の擾亂はますます烈敷マホメットの一身の安危測る可からず、暫く亞弗利加のアビシニヤに避けたり、然りと雖も信徒は漸次に加はり、コレイシ族の迫害も怠ることなし、マホメットの信徒とは賣買婚嫁交際を禁せしにぞ一時信徒は山陰の洞裏に退き、殆んど飢餓に迫りし事ありとぞ。ヘジラの歳より四年前即基督紀元六百十九年に最愛の妻カディヤ死し翌年に亦も信實の叔父アブラブ世を逝り、加ふるに又メツカには居住し難き形勢となりぬ。(「コーラン」經にカディヤを世界に於て四人の賢婦の中に算したり。パロの妻アシア、基督の母マリヤ、マホメットの妻カディヤ、アリの妻フエチマなり)メツカの東七十里のテイーフに逃げしが、此地にても亦た追はれゼイドは傷を負ひマホメットは葡萄園中に倒れ伏し、一皿の葡萄を或人より恵まれて生命をつなぎて再びメツカに返へりぬ。失望失敗されどマホメットは神の使命を信すること強し、此頃コレイシ族の寡婦ソ

ーダを娶り亦もアブベクルの娘アエシヤを妻とせり、マホメットは五十歳にしてアエシヤは七歳なりき。マホメットの家庭はカディヤの在りし時の如くならず、信徒はコレイシ族の爲に迫害せられ殆んど建設せし宗教も覆へらんと爲したり。一陰一陽の來復は天の道なる哉、この衰運の極に達するや、俄然一道の光を黑暗の裏に見出したり。如何なる機運を得たるかと云へるにメディナに傳教の途を得たるなり、其初は僅に六七人に語りしが其人々よりメディナに傳へられ、兼てよりメディナはメツカよりも偶像を信する念薄く、猶太教の純潔なる禮拜を求むる心なきに非ず、又政治上よりも、マホメット個人より考ふるも種々の便あり、こゝに於てかマホメットの雄辯は頗る効を奏し靡然として教化する勢ありき。終に紀元六百二十二年即ヘジラの第一年の三月にマホメットは其正教徒と共にメツカを去りてメディナに走りたり、ヘジラとは逃走の意なり、果然反對黨のコレイシ族は追撃捕拿せんとす。マホメットは特に艱苦を嘗め山陰に潜み谷間に隠れ牧羊者に由りて乳汁を呑み、洞窟に居りて難を避けぬ、されど萬一敵人の爲に探し獲られんか容易に殺さる可し、四邊は峯巒の重さなるのみなればなり、アブベクルの愁然としてマホメットに對し、我軍に抗抵して戦かはんぞ欲する者は多しと雖も、我軍は唯二人のみなりと云ひし時に、マホメットは毅然として曰く、否、アブベクルよ、我輩は唯二人のみなりと雖も、神は

此中に在りて第三となり給ひぬと答へたりとぞ。此時不思議なるは洞窟の口に蜘蛛は網を張り、山鳩は樹間に唱ひて其洞中には全く人なきことを示せりとかや。我が園石橋山の源頼朝が伏木の事に同じく稀有の事と云ふ可し。其歳の六月の二十日までソウル山の洞窟に在りしが、二十八日にメディナに達することを得たり、この時を以て第三段落と爲す可し、回教に於ては宗教建設の基礎を置きし歳なりき。(紀元六百二十二年あり)

マホメットはメディナに下りし後、アブアユブの家に入り其地の信者に崇拜せられ日々に物品を携さへ来るもの引きも切らず七ヶ月の後に百平方尺の「モスクエー」禮拜堂を建て其周圍にサウダ夫人、アエシヤ夫人の爲に館舎を築き、補祭の如き人々どもに日々の禮拜式を執行し、火曜日には晝の勤めに信者を集めたり、當時終にアエシヤと婚姻の大禮を挙げぬ。既に「コーラン」經は説かれたり、茲に於て殿堂、禮拜式、祝祭日、多妻、經卷、信徒、盡く備はり回教の基礎は置かれたり。メッカより來りし者も多く、マホメットも亦たメッカの住民なりしかば、風土心に適せず鬱勃として爲すあらむと待ちしが、六百二十三年の初に自ら信徒を率ゐるメッカとシリヤの間に隊商を襲ひて貨物を奪ひ數人の虜を得たり、其歳の暮に亦たメッカの「コレイシ」族を襲ひて一人を斬り二人を囚虜となせり。回教が他を侵略するに此役を以て嚆矢となす。以後年々メッカ人と戦ひ尤も劇戦ありしは六百

二十七年三月の役にしてメッカの將軍はアブソフィアンにて一萬の軍勢を率ゐるメディナを圍みしが落すこと能はず反つて敗軍せり當時マホメットの前面にて屠殺せられし猶太人は八百人ありと云へり。此頃マホメットの妻は増加して八人とおれり、曰くカディジャ、サウダ、アエシヤ、ハブサ、ゼイナブ、オム、サルマ、ジュウエイリアの八人なり。此内にてカディジャは世を遊り、アエシヤは極めて若く、オム、サルマは寡婦、ジュウエイリアは敵より奪ひし捕獲物、ゼイナブは養子の妻なりしが一日マホメットは渠が容貌の美に戀着し、信徒等は其情を忖度し、ゼイナブに勸めて離縁せしめ更にマホメットの後房の花と爲さしめたり。

紀元六百二十八年に至り六年間歸りしことなきメッカへマホメットは信徒千五百人を従へて來りしが、先づ府を距ると二日路の所に於て「コレイシ」族と平和の約を結び十年間は休戦を定め、三日間はメッカの聖堂に自由に出入することを許したり、之をホデイビア條約と稱す。

當時亞刺比亞は波斯王、ムシルウアン或はアレキサンドル帝に屬せしが、今は全く不羈の國にして沙漠に奔飛する蠻族か然らざれば「コレイシ」族に似たる種族の互に闘ふあるのみにて統一する政府もなし、又壓抑を試むる政治家もなし、以て回教が一大勢力を振起せ

し源因を考ふ可きなり。

六百二十八年の秋に於てマホメットは亦もやメデナの北に當る猶太人の多きケイバルを襲ひ、獲捕無數なりき。會長キナナを斬首したり、キナナの妻サフィアは未だ夫の血の温かきに敵將マホメットに寵せられ第九の妻となりぬ、キナナを殺せしはサフィアに心ありしが爲なりと云ふ説あり。此時にマホメットは或人に計られ小野羊の肉に毒あり既に口にせしが吐きてやうやくに萬死より一生を得たり、されど口にせし毒の爲に以後身體健康ならず死するまで爲に苦しみたりとぞ。翌年メッカに詣りし時は八年前にザウルの洞窟より逃げてメデナに奔りし當年のマホメットに非ず二千の信徒に擁せられ駝背寛に氣メッカを吞みたり。六百三十年には一月一日に於てメデナを出立し一萬の勢を引牽し、メッカを距つる一日程にあり、篝火はマル、アル、ツアヒラン山に晝の如く照らしメッカのコレイシ族の膽を奪ひぬ。アブ、ソフィアンはマホメットの營に來り先づ歡心を迎へたり、時にマホメットは傲然として「オー、アブ、ソフィアン、神は唯一なり我は神より遣されたる使徒なることを知る可き時は未だ來らずや」と。アブ、ソフィアン本心未だ服せずと雖もマホメットの傍には其の叔父アブ、バス劍を提げて立ちしゆゑ、勢これを拒むこと能はず、先づ式に従ひて信徒となり先驅して府中に入れり。回教徒は府中の四方より入り僅にカ

リッドの抵抗するのみにして、マホメットは、コーランの聖歌を高く唱ひ聖地カアバ(メッカに在り)に來り天使、ガブリエルが、バラ、ダイヌ(天の樂園)より持ち來りしと云ひ傳ふる黒石に接吻し其周圍を七度繞り其他の儀式を行なひ神殿中の偶像的の物を一掃し、偶像を壞ち女祭司等を刑せしのみにて頗る仁政を布けり。渠は既に亞刺比亞全國の首府又最高の靈地を占領せしにぞ、勢威全國を歴し、政教を併せて得て驚天動地の機運となりぬ。時に齡六十なりき。

紀元六百三十二年五月の末より熱病に罹り、病勢烈敷して眠り難き一夜あり、渠はエル、バキアの墓地に行き(エル、バキアはカデジヤを除く外マホメットの數妻は盡く此地に葬むられ回教徒がメデナに於て聖地と稱す處なり)己の罪の赦と死者の爲とに祈禱したり、病は愈々強く一週の間僅に一回聖堂に於て信徒に教へしのみ。後はアエシヤの室にのみ在り、信友アブ、ペクルに己の爲に祈禱せんことを請ひたり。大病の常として一度快愈の氣色をあらはし六月の八日に於て再び聖堂に出でマホメットの病を聞きて集り來る群集に教しへ、甚敷困憊してアエシヤの室に歸へり病草まり苦痛甚し、アエシヤは百方手を盡くして慰めたり。死期に近づくやをりく「樂園の永遠よ、赦せよ、光榮は高き所に於て親しまん」との言ありしのみ。

メツカの預言者は世を遊れり。

教義

亞刺比亞人は元來以色列人と其種族を全じふし、クシ「シエム」「イシメエル」「ケタラ」「エリー」の五族より起れり。特にメツカ人はアブラハムの子イシメエルを以て祖先と爲せり。アブラハムは以色列人の太祖にして實に世界に於て一神教の祖と仰ぐ可き人なり、由來回教が基督教と因縁あることを知る可し、然りと雖も亞刺比亞人には其特性ありて基督教が其國に蔓延し美麗なる會堂を建てしことわれど、國人は之を觀ざりき。されど其教義は能く亞刺比亞人に知られたり。

抑亞刺比亞人の宗教は太古よりして一神教を奉じ他の偶像を設くる下劣の宗教にはあらざりしが星霜の移るに従ひ何時しか偶像教の傾向を生じ、星宿、天使、偶像をば禮拜せり。故にメツカの聖殿にも「ホノバル」と稱する雨の神を設けたり、この「ホノバル」神はメツカの守護神にして、眷屬の神々三百六十あり、以て一日に配し、この神殿を七匝するを以て禮とす、七は天の七星の數より起りしなり、また黒石あり「バサル」の一片にして高六寸幅八寸の一塊なれど天の樂園より天使の携へ來りしものなりと云ふ。聖殿のある所を「カアバ」と稱す、聖殿の最初の建築を爲し、者は「アダム」「エバ」が樂園より追はれし後なりとぞ、以て

亞刺比亞人の宗教は其源を希伯來人と同じふすることを知る可し。茲に其概略を述べ可し。マホメットは以上に述べし偶像教の弊を掃ひ盡して回教は立てられしなり。今「コーラン」經に教しふる所を以て考がふれば其教義は以下に掲載するが如し。

(一)「コーラン」經は神聖なる唯一の聖典なり百十四「スラ」篇あり、信者は棕櫚の葉、白石、皮革等に記載せしが後年に至りマホメットの家の匣中に一部を置き「ハフサ」(妻の名)之を保管せり、されど今日用ふる所の「コーラン」はマホメット在世の日に完成せしものに非ず、カリフ「アブ・ベクル」。又「オーマル」の代にマホメットの秘書官たりし「ゼイド」「イブン・サビト」の手に由りて寫されしものと思はし。

(二)唯一の神を信することは「コーラン」百十二「スラ」にあり、曰く、神は一神なり永遠の神なり、神は生れず、生れし者に非ず、云々回教は純然たる「ユニテリアン」の教義なり。

(三)神の外に神なし、マホメットは神の預言者なりとは回教正統派の信者の常に口になす所なり。

(四)樂園と地獄に就きては第五十五「スラ」に樂園に七重の天あり。地獄にも七重の別ありて罪を犯せし回教徒、基督教、猶太教、星宿を拜する者、魔術を行なふ者、偶像を拜する者、偽善者の爲に備へしものあり。樂園はまた龍腦水を混和せし美酒を呑み、園庭あり絹帛の



衣あり、長椅に倚り手を伸ぶれば容易に採り得らる、枝に累々と美果は熟し、又其他に緑樹の茂れる園庭あり人毎に噴泉ニツあり、菓樹、棕櫚あり、廣室に入れば五人の美女は黒瞳子麗はしく容貌美艶なるが傍に侍す云々どあり。地獄は之に反して、猛火の炎々たる處にして悪人は之に投せられ沸へおがる噴水を呑み食す可き物なく枯燥したる荆棘のゐるのみ云々どあり。第八十八「スラ」にあり。

(五)天使には「ガブリエル」あり、「ミカエル」「アズラエル」「イスラフィエル」等あり。悪天使即魔鬼には「エプリス」と云へるあり、この他に「マホメット」は靈鬼(Demon)を信ず、屢次「アラビヤ」夜話にもあらはるゝ如き一種の妖怪なり。「コーラン」には人と靈鬼を救はんが爲に「コーラン」を與へられたりなどあり。

(六)祈禱は回教の特に重んずる所なり、別して黎明の祈禱を重んじ、早朝の祈禱は天使によりて神に達し得らるゝものと教しふ。「マホメット」も祈禱は宗教の柱なり、樂園の鍵なりと教しへたり。敬虔なる信徒は(第一)日出前、(第二)正午、(第三)日没前、(第四)日没後、(第五)夜の五度に祈禱をなす。一定の時にあたれば沙漠、家、店舗、群集の市街、其所を問はず、甍又は布片を地にして沓を脱ぎ「メッカ」の「キブラ」信者が其地に對して祈禱す可き所なり、面に向け莊嚴肅然たる態度を以て禮拜す。然りと雖も尋常の信者は日出と日没とに祈禱し、他

は金曜日に聖堂へ詣りて祈禱を爲すあり。

(七)齋するにあたり通常の潔淨法は手足と首と顔を洗ふなり、されど重き潔淨法は全身を水を以て洗ふ、もし水を得ざる時は乾燥せし細砂を用ふるなり。

(八)珠數(九十九の珠あり)を用ひて稱名(シヤウフ)に似たることを爲す、其句の意は、神は最大なり又は、神に讚美ある可しなど、云へり。

(九)豫定説(宿運)は頗る極端あるものあり、神は全く任意的に人に賞罰を與ふ、善惡の報、從順不從順の結果、幸不幸、盡く皆な「マホメット」の教に由り神を信ずると信せざるとに由りて定めらるゝなり、各人の運命は其頭邊に結び着けらるゝ或は、一ツの靈魂も神の許可あらざれば死すると能はずなど、「コーラン」にあり。

(十)救靈の道に就きては神より與へられたる「コーラン」經の教に従ひ、信仰堅く、定時の祈禱施行、來世の生命を確信し、善事を行ふ者にあり。勿論回教を信せざる者の救はるゝ事を得ず。「マホメット」は基督教徒が基督に對するに救世主を以てするが如きとに非ずと雖も、神人の間に立ちて中保の地位に立てり、故に其墓も禮拜せられ他の回教中の聖者も亦た禮拜せられて全恩の神(アラア)に達するの道と爲せり。

(十一)巡拜(ヒジヤム)は回教徒の尤も重んずる所なり、故に己れ自ら赴き難き時は代理を「メッカ」に

遣りて巡拜せしむ、モロッコ地方に於ては死後に於てさへ其人の爲に代りてメッカに赴けば神恩を受くる事と信せり。

(十二) 禁食は自死せし者(屠殺に非ず)血を流せし者、豚肉、偶像等に献げし肉類なり、特に豚肉は回教徒の嫌ふ所にして、今日も堅く守れり。

(十三) 飲酒及賭博を禁じ、酒博の二ツは悪魔の計畫にて神を忘れ祈禱を怠たらしむる爲なりとあり(第五、スラ)。鴉片は元より禁せし明文なしと雖も、不正なる所業として煙を吹かず。

(十四) 殺人罪は尤も重く、其罰は地獄の火に投げ入れらるゝ者とす。されど、異教者との戦争に就きては別に赦ふる所あり。異教者が抵抗する限りは戦ふ可し、其の聖軍の爲に討死する者は樂園に生まるゝとを得ん、囚虜にせし女子は奴隸と爲す可し、假令人の妻たりとも取りて妻と爲すに妨げなし。此條を以て回教徒が他國人と戦ひて暴逆なれど其良心に責められざりしを見る可し。

(十五) 奸淫の最も禁ずる所なり、又娼妓と婚姻する事を許さず。

(十六) 妻の數の殆んど制限なし、三四人の妻ある上に亦も妾を置き女奴を蓄ふることを許せり、又離縁は全く夫の權内にあり、宗教上に於ては許さるゝと雖も實際は一人の妻の

みを以て満足する者多し。(されども、三ヶ月間に、一人の妻を迎へて生涯に、二、三十人の妻を持ちし者も少なからざるとぞ)

(十七) 祭日は、ラマーズム、ベイラム、クルバン、ベイラムの二祭日あり、ラマーズムは回教曆の十月、クルバンは歳末なり。他に一大祭日あり(歳始の十日間)牛羊を犠牲となし頗る盛大なるものなり。

(十八) 施行は回教徒の特に重んずる所なり。施行に二種あり、ザカト、サダカトと稱す、前なるは規則的に集むるものにして、後なるは随意に爲しゝなり、故に昔は所得の十分の一を集めしが今は租税の法ありて集むるとなし。この金を以て孤獨に施行せしは論ずるまでもなく、他の宗教上の費用にも具へしなり。

(十九) 回教徒は人死して其夜は未だ靈魂其體を離れず、ムンキル、ナキルの二天使に由りて守らるゝと信せり。

(廿) イスラムとは回教の名なり。宗祖の名を以てマホメット教と稱し或は支那領中央亞細亞の回紇地方の宗教なるが故に回々教と唱ふれども正しくは、イスラムと云ふ可きなり。イスラムとは神意に全く服従する義なり。

(廿一) 回教にも宗派あり、サンナー、シャアスの二大派とハニファ。マリク。アル、シャフ

エイ。イブン、ハンバル。の四博士の學說あり。土耳其、埃及、北印度はハンバル說に屬すれども、カイロにてはシャフエマリクマリックの兩說に屬する者あり、モッコモッコ及亞弗利加アフリカのマリックに屬す。亞刺比亞、南印度等はシャフエに屬す、極めて少なきはハムバル說なり。今日波斯はシャアス派、土耳其はサンナー派なり、印度は信徒の二十分の一、シャアス派ある割合なりとぞ。

回教は信仰と實行との二大部に分ち、先づ信仰の部に於ては神は唯一なる事、又全智全能大慈にして凡百の善事を爲さしめ給ふ者と信じ、マホメットを神より遣はされたる預言者と信す。神の外に神なし、マホメットは神の預言者なりと云へる數言は回教の基礎なり。次に「コーラン」「コーラン」とは讀む可きものと云ふ義なり、神の垂教と信じ、天使、靈鬼、惡魔、靈魂の不滅復活、審判の日、善惡に就き神の全權ある事等なり。實行の部に「信仰の爲の儀式、祈禱、斷食、施行、巡拜」の五事あり。

一言に約すれば猶太教に基督教の說を加へ亞刺比亞人に適する法を取りて一神教を建設せしものなり。マホメットの人と爲りも舊約全書中に散見する王候或は預言者に似たる者にして之を新約以後の使徒、大監督と同日に語る可き人に非ず、其勇其智驚歎す可きものありと雖も蠻俗を脱せざるあるは遺憾なり。

### 傳教

回教の傳道は基督教或は佛教など、同日に談す可からず、其傳道の方法は職として劍光の影に在りたればなり。されど今日回教の弘通せし地の廣き其信徒の熱心なるは其中に一至誠のなくんばあらず。

マホメット死して其遺骸は最愛の妻アエシヤの室中に葬れり。其法嗣にアブ、ベクルを挙げ、カリフの位を襲げり。アブ、ベクルは職にあること二年四ヶ月間なりき。次にオーマル職を嗣ぐ、此時に至りてはポストラ、ダマスコ、アンテオケ、アレボ等の地方は全く回教に屬しシリヤ全國を平定せり。續きてパレスチナも従ひ、かのオーマル堂はエルサレムのモリヤ山頭に築かれたり。オーマルが戰場に臨むや駱駝に跨り、棗子ぢぢと水とを鞍に着け恭謙にして少しも人に傲る色なし。不幸にして一奴隸の手に害せられたれども、此人の代に回教が制定せし地はシリヤ、エジプトにしてオロンテスより亞刺比亞海、裏海よりナイルに達したり。半月簾の光輝は、カリフオーマルの世より發せしと云ふ可し。オーマルの代は紀元六百三十四年より六百四十三年に至る。

マホメットよりオーマルまでは回教に分裂の色なし、オーマルの死後メディーナの會長たり

しオスマンは「カリフ」の職を襲げり、この時に回教は西方遠く「ヘルキユール」の柱と稱せられたる亞弗利加の西北隅に達し、又波斯の「コーラン」アフガニスタンのバルクを占領し、其他「スビヤ」「サイブラス」「ローデ」をも併せたり。マホメットの死後計るに二十二年後なりき。アブ、ベクルもオーマルも徳望衆に秀でしかば、マホメットの血統に非ずと雖も、能く法位を襲ぎて回教を盛ならしめしが、オスマンは徳望大に劣り終に分争の憂を在位中に醸生せしめぬ。當時オスマンの下に一將ありアリと稱す、此人は教祖の従弟にして養ひて子と爲したる者なり長く北亞弗利加に在りて大軍を統御せり、されどオーマルまでは法位を窺ふ念もなかりしが、オスマンの代に至りてはアリも法位を襲がむと欲するの念を發せり、故に六百五十四年オスマンが害せらるゝと共に起ちて位を争さふに至れり。アリは揚言して教祖の正統は我に在り三「カリフ」アブ、ベクル、オーマル、オスマンは法位を篡奪せし者なりと叫び、正統の法主は靈に於ても肉に於ても共に相續す可き者なりと云へり。終に立ちて位を嗣ぎしが其治世も短かく國內の擾亂一日も治らず又刺客の手に倒れぬ、其子ハサン位を襲ぎ又其子ホセイン後を承けたり。このアリの黨にて編集せし「コーラン」經には誤謬も少なからず特にアリの血統論を堅くしたる點多し、この派を「シャアス」と稱す。アリに反する者頗る多し「アムル」信仰の母と呼ばれたる「エジプト」の總督ア

エシヤ、シリヤの總督ムアウア等なり。終にムアウアは推されてオスマンの後位を襲ぎ「ダマス」を都とせり百年間に十四代の法主ありて東部の回教國を治めたり。この人より起りし國を「オメヤ」朝と號す、後にアブ、バシデス家あり「バグダッド」を都となし「オメヤ」を追へり。「オメヤ」の一君アブド、アル、ラーマン「西班牙」に脱れ「コルドウア」を都となし三百年間相續せり。アブ、バシデスの世に「コーラン」經の編集あり誤謬少なし、之を「サンナー」派と稱す、シャアス派の編集より前なり。回教は盛大なるに従ひ王位を争を以終に分裂せり。アリの後は亞刺比亞、巴比倫等を領せしが「ホセイ」ンに至り其國盡く「オメヤ」朝に併せられたり。

アブ、バシデス家の最後の王モスタッド、ヘム、ビルラーは侍衛の將蒙古人「ホログ」の爲に逆殺せられ、マホメットが建設せし政教一致の帝國は亡びぬ。後に「土耳其」國の太祖オスマンあり「コンスタンチノール」に都し一時歐洲を震慄せしめしは人の知る所なり、茲に於て亞刺比亞より起りし回教の一大邦國は突厥人種の治むる所となりぬ。然しあがら形體は失なひたりと雖も精神は益々隆盛にして「シャアス」「サンナ」の兩大派は其勢を屈せず今日は世界の三大教と屈指せられ信徒は一億餘ありと稱せらるゝなり。

### ○印度教

印度教即ち婆羅門教は基督教に於ける猶太教の如く、佛教徒もし婆羅門教の事を知らざれば、釋尊が布教の當時の情況を知ること能はじ、婆羅門教が佛教に由りて改良せし點少なからずと雖も、佛教が婆羅門に負へるとは尤も多し。

抑々今日の印度人は種々の人種より成り立つと雖も、印度の正統人種と稱す可きは中央亞細亞より波斯を経て印度のシンドウ河(今のインダス)邊に移りし「アリアン」人種と爲す、必竟今の印度の國名はヒンドウ(Hindus)の聲の忽なるより轉じて信度或は印度(Hindus or Indus)とは變せしなり。この人種は恒河河邊に蕃殖し梵語も毘陀もこの中より成りしものなり。されど「アリアン」人種の殖民せざる前に夙くより「スシアン」(Sythian)「ドラウイディア」(Dravidian)の兩人種ありて、印度の海岸或は河邊に住しぬ、この他に支那の苗族に於けるが如き印度の原人種あり、古典に猿王若くは獼猴を以て呼ばれし者ありき。「アリアン」語は梵語「ブラクリト」ブラクリト「ズザンド」ズザンド「波斯」アルメニアン「ヘレニツク」イタリク「ケルチツク」チユートニツク「スラウオニツク」等の語源なれば如何に此語の影響する所と古代より發達せしものなるかを推考す可し。「アリアン」人種が波斯より印度に分れしは基督紀元前二千年或は

二千五百年なりと傳ふ、今を距つること凡三千八百年か又は凡三千三百年の太古と知る可し、印度は哲學、宗教に於ては世界の史上に炳然たるもの多しと雖も、政治、産業の上に於ては昔よりして見るに足る可き事物亦し、故に毘陀、摩奴等の妙典ありと雖も、國史は存せず、從つて國家的の觀念も乏しく、支那よりも更に自治の精神なし、紀元前五百年(二千三百九十年前)には波斯の「ダリユクス」ヒスタクスベスの爲に侵略せられ、紀元前三百廿七年には亞歷山の爲に犯され、紀元七百年には回教の「カリフ・オームル」の爲に、後また蒙古人の爲めに征服せられ、近くは英國の屬邦となりぬ。爲に人種も種々に分れ、宗教も亦た様々あり、曰く婆羅門教、佛教、回教、火教、基督教等なり。今や印度國人は凡二億四千万人あり、廣きこと殆んど歐洲全地に同じ、この國にして異域萬里を距てたる一小島の英國人の爲に支配せらるゝとは其國人の荏弱ある驚くに堪へたりと云ふ可し、然りと雖も此國にも亦た特性あり、屬すると雖も英國人に屈せず、從ふと雖も英國人を信せず、今に於て主權者の英人と被治者印度人「アリアン」種の正統なる者なりとは氷炭相ひ容れず、又水と油に於ける甚敷軋轢ありとす。この印度人の思想を養ふに精神を鍛鑄するは婆羅門教なり、祖先より養ひ來りし萬有神教論なり、加ふるに日月に増し來る多神教の迷信なり。印度人は毘陀の一神を解釋するに凡神論を以てし、凡神論は多神説に傾むき、終に印度の神には二億

四千万の人口より多しと云へる奇観を呈するに至りしなり。毘陀に由れば神は唯一なり。經中に左の語あり。

“EKam eva advityam”

英語に譯すれば

“There is but one Being, no second.”

唯一の實在者あるのみにして第二なるものなし。この唯一の實在者とは梵天即ちブラフマンなり。唯一の宇宙の精靈なりとす。印度人の研察するは毘陀なり。印度人の信仰するは梵天、大自在天、ウイシヌの三神と千万の神々あり。印度人の考究するは萬有神論なり。印度人を教ふるは摩奴の法典なり。印度人を治むるはカスト、即ち族制なり。印度人は他の人種を見ること殆んど人類を以てせず。飲食を調理するに若し他人種の影をうつす時は如何かる珍膳美味も擲ちて食せず。他人種ならず己より下級の族民を見るも亦た同じ。支那、埃及、波斯、印度は世界の古國なり。此後全く腐敗したるや或はこの斷礎壞壁の中より如何なる花果を生ずるや否や。

### 古代の婆羅門教

今日の婆羅門教には二途あり、一ツは毘陀を研究する正統的印度哲學なり。一ツは普通に教化するを旨とする教義なり、之に亦た兩様の道あり、一ツはカルマ、マアルガと稱し行事の法なり、曰く犠牲、儀式、戒規、苦行なり。一ツは、ブハクチ、マルガと稱し信仰、敬虔の道なり、かく見れば頗る單純なるが如しと雖も唯一の神は様々に化現するものと信するが故に天神あり、半神あり、魔鬼あり、靈あり、人獸、草木、山河盡く皆な敬崇禮拜せらるゝに至りしなり。されど婆羅門教の最上無二の法典は毘陀あるのみ、少しく茲に述べん、毘陀とは智識の義なり、この書の中に印度の神學、哲學、律令、古神學、を包み、婆羅門の信條、論說、風習等百般の沿革となれり。毘陀は分ちて兩部と爲す、一ツは「スルチ」、一ツは「スムリチ」と云ふ、スルチの部には

- (一) マントラ 即 讚歌 (Mantra)
- (二) ブラマナ 即 儀式 (Brahmana)
- (三) ユパニシエド 即 哲學 (Upanished)

あり、加ふるに「ダルサナス」と稱する哲學の系統あり。「スムリチ」は毘陀の本書の如く天啓の物に非ず、人作なりと雖も毘陀後口碑に傳はりし百般の事物を蒐集せし書あり。四部に分かる。

- (一) ヲエダングスは讚歌儀式、發音法、樂譜、文法、毘陀の註解、星學なり。
  - (二) スマールタ、スートラスは家庭、寺院の法制なり。
  - (三) ドハルマ、サーストラスは律令なり(特に麻奴の法典)。
  - (四) プ、アクチ、サーストラスは古傳的の詩なり。
- 以上の如くに分るゝと雖も、更に大別すれば四門に別るゝなり。
- 第一門 毘陀經の三部即「マントラ」「ブラマナ」「ウパニシャド」
  - 第二門 「ダルサナス」の哲學系統
  - 第三門 「ドハルマ、サーストラス」即ち律令
  - 第四門 「プ、アクチ、サーストラス」即古傳的詩
- この四門の中に古代宗教的觀念の詩、宗教的儀式、及び犠牲、合理的、凡神學的の哲學、四種の階級制度等を説きて洩す所なし。
- 毘陀は長篇の詩と云ふ可きものよして、紀元前千五百年より千年の間に成りし讚歌なり、(諸誦口授して書冊に記載せしにあらざり)四部分に分つ
- (一) 梨俱毘陀 千〇十七篇の讚歌あり
  - (二) 娑摩毘陀 梨俱より引きし句多し、尤も蘇摩樹を搾りて因陀羅神に献ぐる式を説く

- (三) 治受毘陀 犠牲を献する法を説く
  - (四) 阿闍婆毘陀 咒詛、攘災に關するを述ぶ
- 毘陀經に由れば神の名の最も古るきは「ダイヤス」(Dyaus, or Zeus)なり、即ち天父の義にして希臘或羅馬の「ジニビテル」神と同じ後に波斯の古神學の爲に進歩して「ウアルーナ」神あり、「ミトラ」神ありしが終に造化の三神とも云ふ可き
- (一) インドラ神 雨露の神なり
  - (二) アグニ神 火の神なり
  - (三) スーリア神 日の神なり
- となれり。此の他に黎明の女神「ウシヤアス」日の神と女神「アスウインス」の間に生れ給へる雙生子あり、我が國にも響きわたりし冥獄の大王閻魔神あり。梨俱毘陀には神の數、三十三あり、皆な三の聖數を以て乘じ來りしなり、印度に於て三の數は毘陀の昔より尊敬する所にして、ボンベイにある象洞(エレハンタ、ケーブ)の大像ハ一身三頭なり、以て萬有を三に綜合するは印度人種の特有の思想と知る可し。然りと雖も元と是れ一神の化現に由れることなるが故に三と云ふも三十三と云へるも増加して三百、三千、三万に達するも毫も數量に關する所なし、之を萬有神教の特色と爲す可し。毘陀の古代には未だ輪廻説な

し寡婦の再婚を禁ずることなし、族制の鐵案なし、外國旅行を禁せず、早婚を勸むることなし(以上は今代の弊風なり)神徳を自然に配して崇拜すると雖も、未だ形像を造りて木石に刻むことを爲さざりき。移住せし「アリアン」人は耕耘の業に長け、牧畜を營み、冶金術工藝品を造り、城市を立て、首領を戴き、哲學を考思し、牛乳を呑み、牛肉を食し、犠牲を献じ、數妻は娶りたりと雖も、教ふる所は一夫一婦の道なりき。其皮膚の色は黒きは印度の原人種と婚交せしが故なり(原人種の黒きは全く日光の爲に焼けしなりとぞ)

毘陀の第二部「ブラマナ」には犠牲の事を詳細にわけたり、「ブラマナ」の古き部分には紀元前七百年に書されしものなりとぞ、毘陀の四部に各々「ブラマナ」あり、梨俱には「アイタレヤ、ブラマナ」「カウシタキ、ブラマナ」、娑摩には「ブラウドハア」「シヤドウィンサ」等八「ブラマナ」あり、治受には「ダイチリヤ」等の二「ブラマナ」あり。阿闍婆には「ゴバサー」「ブラマナ」あり。後世に至りては毘陀の本巻と云ふ可き讚歌(マントラ)よりも儀式(ブラマナ)を重んず。「ブラマナ」に由れば人を以て犠牲となし、は「アリアン」入種の採らざる所と見ゆれども、「ドラウイディアン」等の原人種は老少を以て犠牲と爲し、弊風あり、其の侵入を防遏せむが爲に代ふるに馬、牛、羊、野羊を以てせり、且つ初は犠牲の本意も贖罪的にはあらず、供物的にして牛酪を火に燻き、蘇摩の汁を地に灌ぎて「因陀羅神」を祭れり。後には贖罪的に傾き、紀元前八百年より、五

百年の間に至りては日に千頭の犠牲を献じ、地上には血の池を湛え、數百の祭司は四肢を般血に染めて奔走するに及びぬ。五百年の當時に釋尊がこの犠牲的宗教に反して慈悲の佛教を唱へしは時機偶然にはあらざるなり。

毘陀の第三部「ウパニシヤド」即ち婆羅門哲學は毘陀の「ジナーナ、カンダ」(智門)の部に屬し、「マントラ」「ブラマナ」の如く「カルマ、カンダ」(行門)の部に屬せず、一般の人民は「カルマ、カンダ」の門より神を信じ、祭祀を行ふと雖も、一部の哲人は讚歌、犠牲を以て満足すると能はず、爲に「ジナーナ、カンダ」の門あり。「ウパニシヤド」の説く所は宇宙の原由、神の性、人の靈魂の質、靈物の和合等なり、宇宙に唯一の存在者あるを認め、その存在者が宇宙を設立せしなりと論ず、多くは散文なれど時に詩を交じへ、頗る神祕的、比喩的の書なり、この「ウパニシヤド」も亦た梨俱、娑摩等の四部の中に分かれしものなり。又「ウパニシヤド」は「ブラマナ」と「ダルサナス」哲學との間を繋ぐものなり。紀元五百年後は六大哲學に分れたり。

- (一) 尼耶也 (Nyaya) 論師ゴータマ
- (二) 毗世 (Vaiseshika) 全 カナーダ
- (三) 僧佉 (Sankhya) 全 カピラ
- (四) 儉迦 (Yoga) 全 バンタニジャリ



(五) ミヤンサー (Mīmāṃsā) 全 ジャイミニー  
 (六) 毘陀 (Vedānta) 全 バダラーヤナ

かく哲學は發達し玄妙幽玄の學に心を委ねど雖も、毘陀經中の讚歌祈禱の中に潜める宗教的の解釋は念頭にかけず爲に普通の人民は徒らに虚、儀空文に流れ祭司に過重の尊敬を爲し終に厭ふ可き偶像教國とはなりしなり。嗚呼、貧富の不平均も恐る可しと雖も、智識の不平均も亦た一國の衰亡を醸すに至るなり。

「ウパニシャド」より左の哲學的信條は成れり、今日も印度哲學者の奉ずる所なり。

(一) 靈魂は既往も將來も永遠なり

(靈魂に二種あり最高と個人となり)

(二) 物質より宇宙は進化せしものにして物質は永遠なり

(印度哲學者の語に「一物も空より生せしものなし」(Ex nihilo nihil fit.)

(三) 靈魂は思想、智識を離れて抽象的のものなりと雖も感覺を具へし外物と合し或は形體を着くる時は意思と結合して思想、意識、感覺、認識をはたらかしむ。

(意思是靈魂へ思想を送る入流の如し)

(四) 靈魂と形體と合すれば羈絆となりて靈魂をして悲痛す可き地に置くなり

(行爲あれば必ず善惡の果を食ふ可きなり、食らへば必ず亦た賞罰の従がふものなり)

(五) 賞罰の諸縁を去り悲苦より離れんと欲する者は先づ諸縁に従がひて賞罰の地を動かすんあらず(天も最極の樂土に非ず地獄も最終の苦境に非ず)卑きより高きに進む可し、順序に四階級あり

(一)「サーロキヤ」神と偕に天に在りて住す

(二)「サーミプヤ」神に近づく

(三)「サーループヤ」神と漸次に同じくなる

(四)「サーユージュヤ」最高の神と全く一ツとなる

(六) 靈魂は輪廻の法により此より彼へと移りて止まらず。善惡、悲苦、病患、不運、愚痴等は嘗て人が自由の意志を以て爲し、行爲の結果なりとす

以上の六則を以て考ふれば「ウパニシャド」に論ずる所は善惡の行爲を禁じ、愛憎の念を斷ち、個人的差別を捨て單純なる靈魂の状態に歸するなり、故に婆羅門哲學の大極の目的は「サッチャト、アーナンダ」(Sat-cit-ānanda)と稱する清淨の生命、清淨の思想、清淨の歡喜の三位なり。生命とは云へば虚無なり、思想とは云へば虚無なり、歡喜とは云へば虚無なり。

所詮は差別なく執着なき虚無恬淡の玄理と知る可し。佛教は心にあり婆羅門教は神にあり心を論ずるも神を説くも達する所は玄妙の域に在るなり。

古代の婆羅門教は發達するに従ひ宗教哲學の儀式見解も雜然として起り智度論には九十五種の外道ありと云ひ提婆菩薩の涅槃論には二十種に大別するに至りしなり以て當時の全盛を下す可きなり。紀元五百年の頃に毘陀經の次に尊敬せらるゝ麻奴の法典世に出でたり(毘陀に由りて述作せしなり)麻奴は印度の北西に住せし「マーナウアス」族婆羅門種の手になりしならん。この書は歌謠す可き詩體なり。麻奴とは一聖人の名なりと雖も神仙的の名稱なれば編者は分明ならず法典中には宗教哲理道徳を教しふるのみならず印度唯一の法律書なり元より他の經典と同じく口傳を以て後世に承け來りしことなれば書冊となし、は比較的返世なりと雖も編集せしは頗る古代のことと思はるゝなり。又この法典を以て近世のナポレオン法典など同一視し印度に威權ある一統の政府ありて法官に命じて編集せしものとは思ふ可からず印度には史記なし況んや古代の事は知り難しと雖も統一せし政府のなかりしは疑ふ可からず恐らく此の法典も一地方の制度を記載せしものと見ゆるなり。

麻奴は四大部に別れ族制、法律、贖罪、業因等を論ず、特に印度の四大族制の間に鐵關を設け

しは麻奴法典の力なり四大族とは

- (一) 婆羅門 (僧族にて祭祀學藝の人なり)
- (二) 刹帝利 (士族にて政治軍隊の人なり)
- (三) 吠舍 (農族にて耕作種藝の人なり)
- (四) 成陀羅 (奴婢族にて使役賤業の人なり)

この四族は梵天(ブラマ)の身體より化成せしものにして婆羅門は神の口にて成り刹帝利は神の手より成り吠舍は神の股より來り成陀羅は神の趾より來ると説けり故に婆羅門族は印度の太陽の如く他の三族はこの太陽の周邊を繞ぐるものと知る可し。この四族間には牢固の鐵壁ありて彼よりも越す可からず是よりも入る可からず然れど婆羅門のみは他になき特權を有す我が國人は封建の代の士農工商の世襲の制を考へ一族の他族に對するは恰も殿様と士と百姓と町人との間に生ずる感情を以て推察す可し而して印度人の感情は之に百千倍を加へ穢多と士人との間の相違と思はゞ少しく近かる可し。三十年前には穢多と火を同じふして飲食する者なく人にして禽獸なりと感せしなり。婆羅門族には四期の生涯あり第一は婚姻前の學生時代。第二は婚姻して後の戸主時代。第三は隱者となる時代第四は比丘となれる宗教的生涯の時代なり。婆羅門の修行は毘

陀經の三大部を學習すると十二懺法を行なふとなり(Sanskrit)又三條の紐を左肩より右の脚にかけて婆羅門族たることをあらはす、其他珠數を以て數ぞへ朝夕二度祈禱を爲せり(稱名念佛と同じ)又魚肉、獸肉、五葷、酒等を嚴禁し全く佛教の僧侶と同じ。麻奴は輪廻を説けり、毘陀にも既に輪廻説ありと雖も麻奴以後分明に教しへられたるなり。又道徳に就きては左の抄譯を見る可し一斑を以て全豹を窺ふことを得ん。

「日々怠らず己の職業を勤め、來世の同行と頼む可き友を得よ、蟻の如くに徳を積み蓄へよ。寶を集むるとも寶も携ふること能はず、父母、妻子、親戚も汝に伴はざる他界に赴く時爾の徳のみは唯一の同行たる可し。」

麻奴法典の外に十九の法典なり、特に名あるは、ヤーイナウアルキア法典なりとぞ、麻奴は黒「ヤジュルウイタ」學派より、「ヤーイナウアルキア」は白「ヤジュルウイタ」學派より出でしなり、兩法典ともに今日印度に行なはる。

### 今代の婆羅門教

印度史の正確なる事跡を知り得べきはチャンドラグプタ(Candra Gupta)王の以後なりとす、紀元前三百年當時既に佛教は五天に盛んに行はれ、王も亦た心潜に佛教を信じたり、其嗣

王アソカ(阿育王)に至りて盛んに佛教の外護の檀那となりしは世の知る所なり、或は云ふアソカ王とチャンドラグプタとは異名同人なりと。兎に角に當時より婆羅門教は衰退し、佛教の勢力はかの四大族の制度を破り、犠牲の陋習を止め、慈悲忍辱の徳を養ひ、輪廻の説を益々堅くし、滅度を以て解脱を得るの方と説き、小乗佛教と知る可し、爲に婆羅門教の弊を救ひしとも少なからず。又婆羅門教と佛教の衝突分争もなか／＼に盛んなりしと雖も、元と是れ一味の法海に入る可き素質あればにや、紀元七百年唐の三藏玄奘が渡天せし時、ペナルス府に於ては兩教の寺院境を接して建てりとぞ。兩教ともに調和を計り易き宗教なればにや、いつしか婆羅門は佛教をして自家の教理に併せたり、終に佛陀は「ウシニユ」神の化現なりと云ふに至れり。

婆羅門教は紀元八百年碩學サンカラアチアに由りて復興せられたり。サンカラア師の唱ふる所は純粹の萬有神教にして一神教と凡神教とを混同せし偶像教ならず、毘陀哲學より發りし一元論なりき。「バラアマートマン」若しくは「ブラフマン」と稱する唯一自存にして最高の自義なる者の中に一致没入するを以て目的となし、實我(アトマン)なる物なきを教理の重なる所となす、されど普通印度教と稱するは以上の如き哲理によれる者からず、族制を頑固に守り佛教と婆羅門教とを混同し、これに「ドラウイディアン」種と原人種

(土蠻なり)の迷信をも加へ、終に今日見るが如き人獸をも崇拜し奇怪の偶像を造りて得々たる異觀を呈するに至りしなり。然りと雖も毘陀經、麻奴經は渠等の崇奉する所なれば例の三數論より造化の三神を設け出しぬ、即ち

(一)梵天(ブラフマ) (創造神)

(二)大自在天(シバ) (破壊神)

(三)ウイシニユー (保存神)

の三天神なり。茲に於てか古代の「インドラ」(帝釋)、「アグニ」(スーリヤ)の三神は隱退せしが如し。梵天は創造神なるが故に今日も用なし、「シバ」「ウイシニユー」の破壊、保存の二神なるが故に敬畏す可しと信じ、終に二大派を起せり、一ツは「シバ」神を信奉する派、一ツは「ウイシニユー」神を信する派なり。「シバ」派は乞食僧の生活を爲す人多く其殿堂も極めて少し、之に反して「ウイシニユー」派は其殿堂も頗る多く、「クリシナ」「ラーマ」神の像と、もに日夕水を以て洗はれ花を以て飾られ、菜果米飯等をさへげ、後に此等の供物は信徒に與へらる、一言に約すれば「シバ」は遁世的、「ウイシニユー」は社會的の神と知る可し。又化身説は頗る盛んにして終に「ウイシニユー」神は十種の化身あるに至れり。

(一)魚(二)龜(三)猪(四)人首獅子體(五)侏儒(六)斧を手にする「ラーマ」神(七)「ラーマ」神(八)「クリシナ」神

(九)佛陀(十)カルキ神

以上兩派の神學に加へて信仰により救はる可き道を教しへし書あり、普通の民は之を第五毘陀と尊みて信ずると雖も、頗る胡乱惑妄の説のみ多し。神人間の愛を説くに人の愛を以て解釋するは未だ可なりと雖も甚敷は不倫なる男女間の戀情を以て説くに至る。この書を分ちて二部とす

(一)「ブラーナス」 (二)「タントラス」

「ブラーナス」の書中説く所は、天地の創造、破壊、改造、衆神、及國祖の系譜、麻奴時代の事、日月、二天子の御宇等なり、「タントラス」も畧ぼ同じく創造、破壊、禮拜式、萬物の終極、最高の靈と一致する四法等なり。この他に種々の派別もあり、神々の名も多しと雖も略しぬ。

近世に至り婆羅門教の一大進歩又一大革命の現象とも云ふ可きは紀元千七百七十四年に印度の「ポルドワン」に生れたる「ラージャヤ」「ラーム」「モハン」「ロイ」と稱する婆羅門が一新宗派を建てたり。此派の力を盡す所は「スチー」「死せし夫と、もに妻を焼く弊風なり」を止め、國民の教育を高くし、純粹の一神論を説き、多神教は古典毘陀の教しふる所に非ざる事を論せり、この一派を「ブラマ」「サマーシ」と稱せり、「ラーム」「モハン」「ロイ」の死後其友「ドウラカ」「ナース」「タゴル」は「ブラマ」「サマーシ」を盛んならしめしが、其子「デベンドラ」「ナース」「タゴル」に至り更に

振起し今の「アーディサマーシ」即第一教會の名を以てせり。この教會は公然偶像を斥け毘陀經に由りて唯一の神を説けり。第三に現はれしはケンヤブ、チャンドラ、センなり、チャンドラ、センは毘陀經に由らず神は父なること人は互ひに兄弟なることを説き基督教の新派と云ふ可きに至れり、之を新「サマーシ」と稱す。猶ほ他にも、ブラールサナー、サマーシ「祈禱協會」アーリヤ、サマーシ等あり、皆な一神を説き、毘陀經の新註解を爲す等の働を爲せり。

以上皆な印度人の常として萬有神教の傾向ありと雖も實に婆羅門教一大革新の時機は印度に發しつゝあるなり。

前に其名は掲げたる如く現今印度に於て六大哲學と稱するは左の如し、(小冊子には概略をも述べ難し今は名目をわぐるに止む)

(一) 尼耶也哲學 (Nyaya proper)

(尼耶也とは分解の義なり、高尚なる心理學にして論理の頗る精確なるものなり)

(二) 毗世哲學 (Vaishika)

(尼耶也に屬せしものと雖も特種の哲理を存し殆んど近代の歐洲哲學に近し)

(三) 僧伽哲學 (Sankhya)

(尼耶也に反して綜合的なり、善、欲、暗、即ち純潔、活動、愚痴の三を僧伽哲學の三一と稱す)

(四) 瑜迦哲學 (Yoga)

(僧伽の一部なりと云ふ、冥想を凝らし最高<sup>スプリム</sup>の實在者<sup>ビインツ</sup>と合する法を説けり)

(五) ミマーンサー哲學 (Mimansa)

(哲學と云はんよりは毘陀の註解なり)

(六) 毘陀哲學 (Vedānta)

(六大哲學中の最上位を占む可きものにして、サンカラカリヤもこの哲學を講究して爲に名あり、尼耶也哲學を以てアリストートル派と見る時は毘陀はブレント派と見る可きものなりとぞ)

この他に「バガウアドギター」あり、サンカラカリヤが註解なり。毘陀經の「ウパニシヤド」を敷衍せしものなり、極めて高遠甚深の學なり。又禪那<sup>ジヤイユスト</sup>教あり、佛教の禪宗に似て非なるものなり。又茶縷<sup>チキリ</sup>婆迦<sup>バカ</sup>哲學あり、印度の唯物論なり。

今古の婆羅門教は以上の如く變遷し、迷信的の印度教は既に志士の憂ふる所となり、「ブラマ、ソマシ」の起るあり、印度の前途は刮目して待つありと云ふ可きか、然しながら未だ<sup>族制</sup>

の陋習の容易に脱し難き偶像崇拜の盛んなるは浩歎に堪わざるもの多し。

### ○道教

其上

史記列傳に老子の小傳あり、

「老子者、楚苦縣厲鄉曲仁里人也。姓李氏、名耳、字聃、諡伯陽、周守藏室之史也。孔子適周、將問禮于老子、老子曰、子所言者、其人與骨、皆已朽矣、獨其言在耳、且君子得其時則怨、不得其時則蓬累而行、吾聞之、良賈深藏若虛、君子盛德容貌若愚、去子之驕氣、與多欲態色、與淫志、是皆無益於子之身、吾所以告子、若是而已、孔子去、謂弟子曰、鳥吾知其能飛、魚吾知其能遊、獸吾知其能走、走者可以爲罔、遊者可以爲綸、飛者可以爲矰、至於龍、吾不能知其乘風雲而上天、吾今日見老子、其猶龍耶、老子脩道德、其學以自隱無名爲務、居周久之、見周之衰邁、遂去、至關、關令尹喜曰、子將隱矣、願爲我著書、於是老子迺著書上下篇、言道德之意五千餘言而去、莫知其所終、老子隱君子也。」

老子は孔子さへ歎じて龍のごとしと評せし人なり、老子は無爲、自化、清静、自正の隠君子なりき。道教は老子を尊みて太上老君と稱し、天尊の一ツに數ふる時は太清、道德、天尊と名

づけて崇拜す。

抑、道教は支那に於て其淵源遼遠なれば、容易に其史を考へ難しと雖も、哲學的、神學的、宗教的の三時期ありて今日の隆盛を見るに至りしならん、道家の唱ふる所に由れば周より以後は左の如し

周

王子喬(靈王之子)。老子。尹喜。列子。莊子。鬼谷子。

著書には老の道德經、列の冲虛經、莊の南華經あり。

秦

始皇帝。徐市。安期生。

漢

文帝(前漢)。武帝。(前漢)桓帝(後漢)。河上公。東方朔。淮南王安。張道陵(天師)なり。

魏伯陽。鍾離權雲房。

著書には河の老子經、東の神異經、淮の淮南子、魏の參同契なり。

三國

諸葛孔明。左慈元放。

晉

孝武帝。許遜旌陽。(東晉) 郭璞。葛洪。

著書には郭の山海經、葛の抱卜子、神仙傳あり。

北魏

明元帝。寇謙之(天師)。陶弘景。

著書には黃庭經、真誥あり。

唐

玄宗皇帝。宣宗。孫思邈。司馬承禎。李筌。張果。李林甫。呂洞賓。(純陽の人天

師) 馬自然。斐航。軒轅集。陳希夷。

著書には李の陰符經、呂の敲爻歌等あり。

後晉

閩主昶。陳守元(天師)

宋

真宗。徽宗。張紫陽。林雲素。王重陽。陳泥丸。

元

莫月鼎。馬玉丹陽。張紫瓊。

明

成祖。張三丰昆陽。

又曰く黃帝、軒轅氏を祖となし、驪山の老婆に傳はり、伊尹、周呂望、范蠡、張良、諸葛亮も信奉し、李筌、張果より朱熹に至ると云ふ説あり。

道教は斯くの如く支那の昔時より發達進歩せしかれどありて後漢の明帝の時に梵僧摩騰法蘭と道士費叔才、呂惠通等法を争ひしとあり、又魏武帝の時に天師寇謙之は帝に重んぜられ爲に佛法の痛く苦しめられたるとあり。又周武帝の佛道二教を廢せし時に寺觀、四萬餘區は王公に賜ひ、僧道四百萬人は軍民に充つると云ふとあり、寺と觀と僧と道士とは共に幾何ありしや知り難しと雖も佛教に對して遜色なきが如し。故に支那史を讀む者は知る可し道佛の二教は或は和し或は争そひ終に今日に至りしなり。

道教は斯くの如き勢力ある一宗教なりと雖も仔細に之を論ずれば其勢力の在る所は老莊列等の哲學に非ずして周秦漢の代に頗る盛んなりし神仙談と煉丹術に加ふるに晉唐宋の間に發達せし佛教を以てし、之に又迷信的の卜筮、祭祀と儒道の訓戒を以て潤色せしもの、如し老莊列等の哲理を味ひ無爲、自化、清淨の玄妙の域に達せし者は方士、道士に少

なく他の哲人にありしなり。故に哲學時代は周の世にをはり、秦漢は仙術時代となり、佛敎東漸の後に佛法と共に老莊の哲理を發達せしめて殆んど佛敎の變相せしむの如くになり、普通人民に満足を與へんが爲に像を設け廟を建て香火を献じ讀經を爲し吉凶を卜し禍福の祈禱を爲すに至りしなり。讀者もし婆羅門敎には一方に高遠の玄理を味はふものあり、一方には迷信の愚痴あるを知らば、道教亦た同じ、少數の道士には高僧、哲人、清淨なる隱者もある可しと雖も、多數は皆な賣僧或は堂守りと見て可なり。道教の大家は寇謙之、李筌、張果、呂洞賓等なり。

其中

道德經、南華經、冲虛經のことは茲に掲げず、道教を信する信せざるに關せず、諸子を講ずる人は我が國に多し、況んや老莊の二子は論孟とにも味はふ人多し。列子は道家の書と云ふも當れりと雖も、鬼谷子、淮南子などは如何なるものによ、道教を見るには左の書に由る可し。

- 黄帝陰符經。
- 太上感應篇。
- 呂祖刪定書。
- 眞誥。
- 丹桂籍。
- 道書七種。
- 神仙通鑑。

特に呂祖刪定書は大本十二冊あり頗る明細なる書なり此等の書により道家の文を擧げ

ん、教理の一斑を窺ふに足らんか。

道は天地の先に生ずを解釋するに無極、虛無、太虛、有生於無、天地之始、真空而含妙有、無名之朴、道常無名等の語あり。又道と殆んど同一の意義を説く爲めに谷神不死、玄牝、萬物之母、太極、一氣、無形、先天の語あり。眞靈而含妙有の語は頗る大乘佛敎家の談に近し。

二元を説くに一元に歸すれども陰陽、天地、動靜、乾坤、坎離、剛柔、木金、火水、理氣、性命、鉛外黑、内白、進陽、火、運陰、符、月華、日精等の語あり、煉丹の法と雖も二元の陰陽を調和して不老不死の靈藥を製し或は諸金屬を黄金に化するなり、故に日月中有藥、日有金、鳥、月有玉、兎、先挹乾坤爲鼎器、次搏鳥兔藥來烹などの語あり、易理、仙術、煉金法、哲理、悟道を烹雜せしが如し。

三元を論ずるには道生一、一生二、二生三、三生萬物、夷、希、微の三者混而生爲一、この夷、希、微の字は道德經第十四の視之不見章にあり、佛人レムーサーの説に夷、希、微の發音はイ、ヒ、ヒ、エ、イ、(wei)なれば耶和華の(Jehovah)の(HV)のイ、ハ、ウに通ず、確然道德經中の三字は耶和華の略音なりとの新説あり。三元を説くに猶ほ多くの語あり、天地人、精氣神、三寶、聖境、眞境、仙境、三清、玉清、上清、太清、身心意、三丹、三尸神、蓬萊、方丈、瀛州の三神山、庚申の不言



不視不聞等あり、四元五元に至る、四象乾坤離坎、五行五徳五賊等の語あり。以上は教理に属すれども、道士の目的願望の達せし時は如何にと問ふに古今仙となりし者十餘萬人ありと傳ふ、我が國の仙家に於ても古今數人ありと信するなり。仙となりし後は黃帝の如く龍に乗る者あり、鶴に跨るあり、雲に駕し、風に御し、天上の天尊に仕ふるなり、されど形神俱妙於道合、眞と云ふに至りては風雲に御し、龍鶴に跨る仙よりも形質を脱し、頗る超然的玄妙の趣あり。

天尊とは玉清元始天尊、盤古混沌氏、太清道德天尊、太上老君即老子、上清玉晨靈寶天尊の三尊なり、或は三尊を虛無上帝又は妙無上帝と稱せり。宋朝より玉皇と仰ぎ明朝よりは北極眞武玄天上帝とも云へり、故に天尊の在る所を玄都或は玉京と稱す。

この天尊は道教の奉ずる神なり、天帝眞君大帝帝君等の稱呼ある所以なり。この他に崇敬するは列仙に非ざれば、關帝の如き英雄或は天上の星宿を象りしものなり。列仙にも種々様々の名ありと雖も、廣乙子、東王公、西王母、浮丘、彭祖等あり、又驪山の老婆の如きも女仙の一人なり、列仙は皆な其壽數百年より數千年に至ると知る可し。

道士にも階級あり、眞人、天師の如きは人に非ず、仙者なれど、普通は道士或は道人と稱し、觀に住するを道長と稱す、觀は佛教の寺院と同一なり、故に道長は院主と同じ、昔時は方士と

稱して幻法を弄せし者もありき。羽士とは仙に因みて呼ぶ名なり、黃冠の名は冠帽の色より起りしなり。

道教に於て重んずる書中の一斑を左に掲ぐ。

陰符經は唐の李筌が嵩山虎口の巖石中より得たるものなりとぞ。同經の舊叙に左の文あり。

「至嵩山虎口巖石壁中得陰符經絹素書朱漆軸以絳緞緘之封曰魏眞君二年七月七日上清道士寇謙之藏諸名山用傳同好其本糜爛應手灰滅筌略抄記雖誦在口竟不能曉其義理因入秦至驪山下逢一老母髮髻當頂餘髮倒垂弊衣扶杖路傍見遺火燒樹自語曰火生於木禍發必尅筌驚曰此是黃帝陰符經上文母何得而言母曰吾受此符三元六甲周甲子矣千八十歲なり乃坐樹下說陰符玄義云々

以て李筌が傳へし陰符經の靈怪なるを推知す可し、諸葛亮孔明の叙には

「黃帝得之以登雲天湯武得之以王天下五刑得之以統諸侯」  
とあり、道教の書にして湯武五刑の爲に力ありしも頗る怪しむ可し。然れども朱熹の叙は評し得て當れり。曰く

「陰符經三百言李筌得於石室中寇謙之所藏出於黃帝河南邵氏以爲戰國時書程子以爲非

商未(中略)文字氣象言之必非古書

其傳來を記するに首演、黃帝軒轅氏、口授、驪山老母、注、伊尹、周呂望、范蠡、張良、諸葛亮、李筌、張杲、朱熹と事々しき名あり、恰も我が國の心學者或は陶宮家が漢にては張良、孔明、和に於ては楠正成、武田信玄、家康公も學ばれて天下を治めたりと云ふに似たり。されど本文は決して卑俗の文に非ず

(上篇) 觀天之道、執天之行、盡矣。故天有五賊見之昌、五賊任心施行於天、宇宙在手、萬物生乎身等の文あり。

(中篇) 天生天殺、道之理也、天地萬物之盜、萬物人之盜、人萬物之盜、三盜既宜、三才既安等の文あり。

(下篇) 瞽者善聽、聵者善視、絕利一源、用師十倍、三反晝夜、用師萬倍、心生於物、死於物、機在於目等の文あり。

また太上感應篇には冒頭に

「太上曰禍福無門、自召善惡之報如影隨形」

の語あり、この篇は陰符經と異なりて善惡の禍福を説く、北斗神名あり人の頭上に在りて人の罪惡を録す、或は云ふ三尸神ありて人身中に在り、庚申の日に到れば天に上りて人の

罪過を言ひ、月晦の日には竈神も亦た然りきと、の文あり。又天仙にならんと欲する者は一千三百善を立つべし、地仙たらんと欲する者は三百善を立つ可しとあり、故に惡事を禁するや日常の細小の事にわたりて周到頗る盡せり、大略左の如し

「射飛逐走、發蟄驚棲、填穴覆巢、傷胎破卵、無故剪裁、一片衣は千蠶の命、散棄五穀、損人物以窮人用、見他色美起心私之、用藥殺樹、呵風罵雨、用妻妾語、妻が斯く云ひしとか、妾が此く申せしと談話中に引用すると能はず、淫慾過度、無行妻子、越井越竈、井戸神あり竈神あるが爲めなり。損子墮胎、夜起裸露、無故殺龜打蛇、」

又文昌帝君勸惜字紙文あり、字紙を路上に見る時は拾ひ歸り泥に汚れしならば香湯或は清水を以て晒し乾かして後に焚く可し、壁に張り附木つひの代用と爲す可からず、物品を包むなかれ。

又文昌帝君の陰騭文には眞朝斗を奉じ佛念經を拜し、四恩に報答し三教を廣く行ひ、先哲を葵牆に見、獨知を衾影に慎しみ諸惡作す莫れ衆善行ひ奉る等の文によれば儒佛を容るゝものゝ如し。又牛犬を食するを戒むる文あり。

又關聖帝君覺世經并論には純然たる儒教的道德を勸むるものなり。

「論曰人生在世貴盡忠孝節義等事、方於人道無愧可立身於天地之間、若不盡忠孝節義等事、」

身雖在世其心已死是謂偷生凡人心即神神即心無愧心無愧神若是欺心便是欺神故君子  
三畏四知以慎其獨

以上の諸經も見る可き所多しと雖も特に呂祖刪定書は道教諸經中の完全なるものなり、  
（道教の眞面目を得たるや否やは判断し難し）眞仙大道五行天地金丹心法等の一切を包括  
す。

谷宗正旨に

「天仙至道古聖相傳止此一法嘗自心心靜驗淵微覺與禪宗實爲相近非俗學鍊命執四大講  
丹功者所可同年語者也楞嚴經十種仙趣非道門正旨其所謂妙明覺性圓滿菩提即道門入  
手第一層功訣也。」

浮邱仙祖曰丹霞一片聳雲霄碧落空中垂末消解使元精歸炁始冲虛盡處得雲橋

又浮邱仙祖曰覺須大覺慧乃眞慧慧由定生定以靜致眞靜之旨索解爲難虛中以課靜寂非定

動得靈機守著非谷谷中靜旨微妙難宣如一面鏡云々

又曰如一川水澄潭印月月末升時浮泓無月月正懸時水天一月水月天月寧有二月挹水取月

何無有月移川視月依然此月須知川川本無此月谷中之靜作如是觀。

又禪宗正旨には

「圓通文尼亦從座起而白佛言世尊我憶往昔入終南山修習仙行彼導師教我升降水火丹鉛  
抽添我時依法行持功成白日昇天因遊方諸路得遇應眞黃龍大覺示我禪宗云々  
この本文は殆んど佛經の句に似たり又稱名あり、

慈尊寶號 一心敬禮

太上慈尊聖母摩利子天大菩薩中天大聖北斗九皇解厄延生上道尊帝星皇君。

又咒文あり、

斗姥心咒唵嘛喇唧囉娑訶

道教の書は此他に多しと雖も掲げし文を以ては、道教の教旨は了解せらる可きならん、  
今日印度に於ける婆羅門教と支那に於ける道教はともに錯雜せし宗教にしてしかも國  
人の感情に適せしものか。

其下

上中の二部に於て道教の大意を述べたり茲には偶像的老子に關する事を記載す可し。  
老子の母は天より星の墜つるを見て感じて孕めり老子は母の胎内に在ること八十一  
にして其母李樹の下に坐せし時に生れたり。胎内に在ること八十一なれば呱呱の聲  
は嬰兒に非ず老翁の大笑にありしか其鬚髮は白く實に老子老翁的嬰兒之意なりしか

や釋迦牟尼の如く左手を以て天を指し右手を以て地を指し、上天下地唯一の道のみ尊敬す可き者なりと宣べ、また李樹を指して曰く「この李を以て我が號と爲す可し」と。其容貌白くして黄を帯び、耳頗る長く清き眉大なる眼、隆き鼻方なる口、一足に十指をそなへ、手は十線を以て文を爲せりとぞ。恐らくは老子、或は李耳の名より考へ出したる妄説なる可し。老子さへも俗了せらるゝなり、人世の實に塵界と云ふ可きなり。

又曰く老子青牛に乗りて關を出でんとす其弟子尹喜は水火も厭ふことなし師に従がはんと云ひ止むを得ず五千言の道德經を遺せり、今や途に上らんと欲する時老子に僕あり二百年間俸給を受けずして仕へぬ、主と僭に關を出づることを好まず、二百年間の俸給銀七萬二千を請求せり、老子曰く我は西海(裏海)をわたり太秦國(羅馬)に遊び厨寶(カゾール)天竺(安西(バルシア))を過ぎりて歸らんと欲す、爾は我の御車となりて同行せよ、歸りて俸給を拂はん、僕敢て聞かず。老子は僕に進み來れと命じ口を開かしめしが、時に神符は脱出し僕の形軀は枯骨となれり。尹喜痛悔して生命を與へんとを願ひしかば、再び生命を與へ銀二千を拂らひて去らしめ老子は雲に乗りて太虚に去れり。又今日道教家の奉信する九百三十部の道書の盡く老子の著述なりと云ふ説もあり。

以上の如き附會の傳説若くは北斗星の化身説、列仙の奇説、龍龜を拜する事、福利を禱する事

等を擧げんには迷信より生ぜし奇談は僕を更ふるも盡くることあらじ、所詮老子は周の代の一大哲學者なり、この哲學者が仙とあり佛となり偶像とならんや、道教により老子は知り難し、老子の道德經を讀みて道教も識り難し。道教は支那に於て建設せられし宗教なり、されど歴史に於て知り難き支那古代よりの民間の宗教的思想を識らんと欲するには必ず道教は學ぶ可きものなる可し。

世界三大宗教附録終

明治二十八年十月廿一日印刷  
明治二十八年十月廿一日發行

世界三大宗教史  
定價金四拾錢

版權  
所有

著者 戶川安宅

發行者 大橋新太郎

印刷者 野村宗十郎

印刷所 株式會社 東京築地活版製造所  
京橋區築地一丁目二十番地  
京橋區築地二丁目十七番地

東京日本橋區本町三丁目

發兌元 博文館

原坦山老師題字 內山正如君編著

北島道龍師著

### 萬國宗教大意

現今社會に處して世界宗教の定義起原發達及び其教理等を悉知し其國勢に適すべきものを撰び國家人民の幸福安寧を企圖すること最も今日の要務といふべきなり然れども萬國の教種其數少なからず從つて諸般の教義に達すること容易ならず之れを要するに其綱領を示すの珍書に據り以て教界の動靜を知るを得ば最も便ならんか本書は此必要に對し佛教耶蘇教各國神教等を數編に分ち周到綿密に其の要義を示したるものなれば有志者の爲めには一日も座右を去るべからざる寶冊といふべし殊に其の終編には各教開立の祖師傳を掲げ又た附録として通俗哲學大意をも掲げた

全一冊洋裝  
三百六十一頁  
正價拾貳錢  
郵税六錢

### 眞宗眞要

全一冊洋裝特別廉價六錢郵税四錢

眞宗は近世佛教の精華なるもの、其盛衰は直に佛教關門の隆盛を來すか如し、故に佛教の隆盛を企圖するは必ず先づ眞宗の教義を起し、佛教の眞髓を求むるを提徑とす、北島道龍氏博學洽聞、夙に眞宗の法將を以て鳴る、後ち印度歐羅巴を跋渉して彼土の政教を觀察し、歸朝して大に佛教の改革を首唱す、其至誠の發揮する所説教となり、書冊となり、就中數十の卷帙世に著はれて、氏の徳聲は益々其隆盛を極めたり、今又本書を著はして眞宗の教義を詳かにし、併て抱負の改良を明かにせり、要之其記事簡畧、其義旨周到、平易流暢間々歐語を加へ、問答を挿み、委しく兩願成就の文を説示せり、嗚呼世の此點に注意する人は、請ふ早く此寶卷を購讀して氏が説述の高妙なるを知るべし。

原田了濟君 編輯  
安藤正純君

### 各宗名家 佛教授演講集

佛敎の勢熾  
漸く宇内に  
揚るるを見る  
なすたる大  
宜しく此期  
に投ずる者  
へからざる  
所は佛敎各  
宗の名師が  
講演せし新  
論數十編を  
治集せし者  
にて之を讀  
む者は布教  
興道大なる  
利益を得  
べきのみな  
らず以て今  
時佛敎の眞  
狀如何を悉  
知するに足  
るべし

全一冊洋裝各宗高僧傳像入  
特別金八錢 郵税六錢

文學士千頭清臣君述  
宮崎晴淵君編

### ソクラテス

全一冊 特別金三錢 郵税四錢

著 君保江 澁

### 哲學大意

全一冊洋裝 正價四錢 郵税四錢

二日唯物派、唯心派。曰く一元論、  
旗幟を立て、統く世人をして何れに歸  
向すべしとせしむるものには、  
網羅を以て、其系統を分ちて、  
西洋哲學の明かにし、  
學問の原質を明らかにし、  
理學の原理を以て、  
解るる者なり。



小宮山毅介先生題詩  
内藤燦聚君 著

### 近世大儒列傳

全三冊 正價一冊金十二錢 郵税四錢

澁江保君編  
雄辯法  
全一冊 正價十二錢 郵税四錢

文學博士島田重禮先生題字  
澁江保君編纂(近日三版印刷)  
國民錦囊

全一冊洋裝 正價九錢 郵税十二錢



## 日用百科全書

日用百科全書は、人生欲く可らざる家庭内外の必需品を、平易なる文章と鮮麗なる繪畫とに由て、詳細親切に説明  
て、總て本邦の生活に適應なるものを網羅し、優美高尚なる冊子として送次出版せんとす。讀者坐ながらにして幾多專門の  
師に就き、一々口授指圖を受くるの益あらん。若之に由て春風の如く、秋月の如く、清潔にして節儉健全にして和樂なる家庭を  
得ば、帝國の地位更に高き一等なるべし。(◎本書第拾五編以下の目次は追て廣告すべし)

### 本書目次

- 第壹編 版六和洋禮式全
- 第貳編 版五茶の湯と生花全
- 第參編 版四實用料理法全
- 第肆編 版三家政案内全
- 第伍編 版二琴曲獨稽古全
- 第陸編 版一衣服と流行全
- 第柒編 版七裁縫と編物全
- 第捌編 版八住居と園藝全
- 第玖編 版九勤學と處世全
- 第拾編 版一〇育兒と衛生全
- 第拾壹編 版一一通俗書簡文全
- 第拾貳編 版一二旅行案内全

毎月一回廿日發兌美裝紙數一冊  
菊版二百五十餘頁◎正價一冊  
金貳拾錢◎六冊前金壹圓拾錢◎  
拾貳冊前金貳圓拾五錢◎郵税一  
冊二付六錢宛

通俗日用化學全書

學理を實地に應用せし、一杓の熱湯以て瀉車瀉船を走りし、人生に無限の効益を興ふ、故に人生の福祉は全く學問應用にあり、本書は學  
術中最も面白き化學を實地に應用して、日用の食品、製名法奇案を蒐集し、兼て分析術、廢物利用、一大利益を  
作物等を造るに、費す所少なくして、得る所極めて大なる名法奇案を蒐集し、兼て分析術、廢物利用、一大利益を  
與へんとす、特に著農學士にして皆な多年農科大學に於て實驗せられたる者、其の精確なるは、辭を俟たざ  
る賜へ

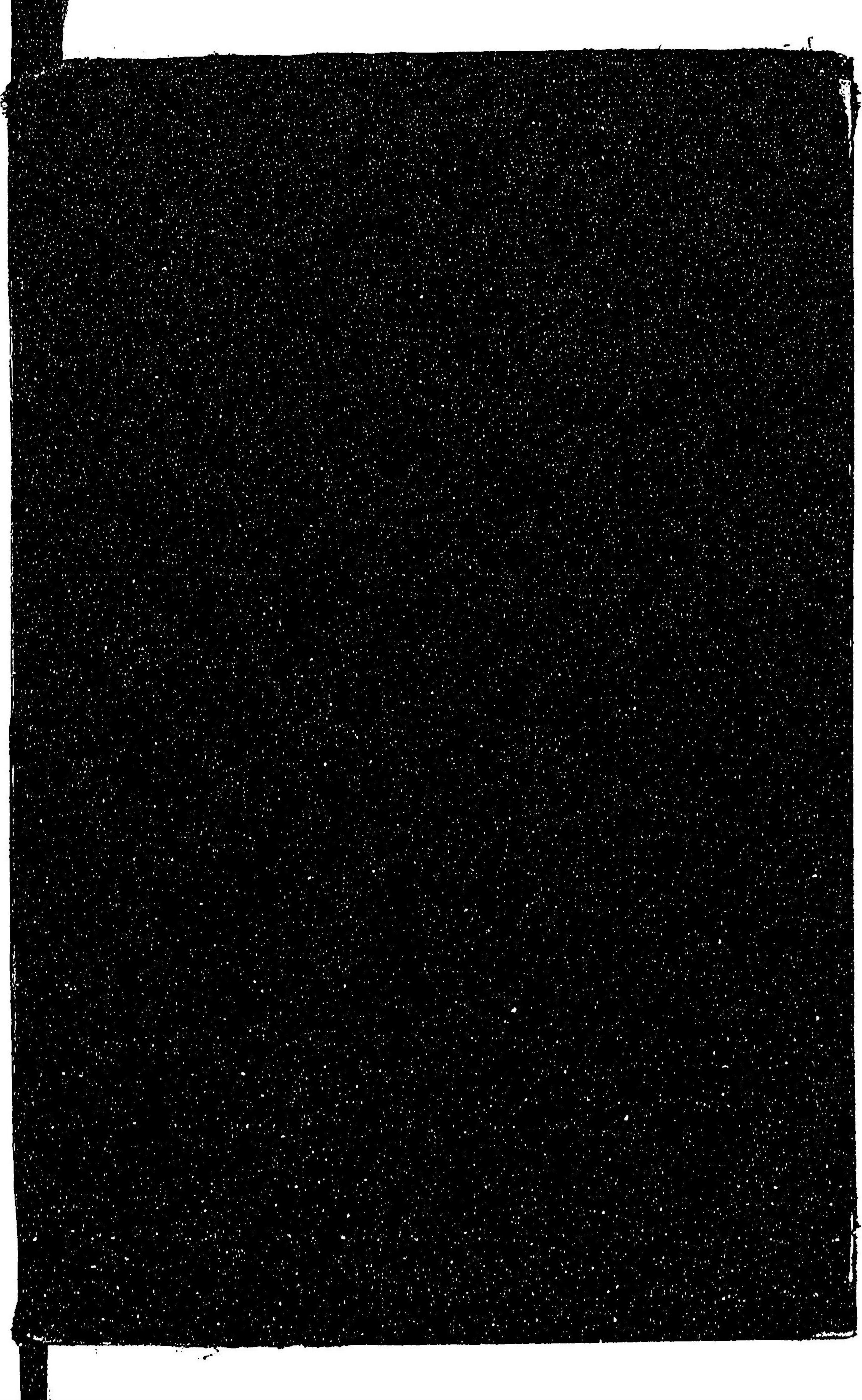
本書全部分目次

- |              |            |            |             |             |             |            |             |            |            |            |            |
|--------------|------------|------------|-------------|-------------|-------------|------------|-------------|------------|------------|------------|------------|
| 農學士 大工原銀太郎君編 | 農學士 辻暢太郎君編 | 農學士 塚本又喜君編 | 農學士 矢木久太郎君編 | 農學士 矢部規矩治君編 | 農學士 奧村順四郎君編 | 農學士 高橋橘樹君編 | 農學士 石井淳二郎君編 | 農學士 塚本又喜君編 | 農學士 山下勝人君編 | 農學士 山下勝人君編 | 農學士 高橋橘樹君編 |
| 第一編 菜        | 第二編 肉      | 第三編 飲      | 第四編 日本酒釀造法  | 第五編 西洋酒釀造法  | 第六編 煙草      | 第七編 製      | 第八編 砂       | 第九編 味      | 第十編 日用品製造法 | 第十一編 實用分析術 | 第十二編 廢物利用  |
| 食            | 食          | 料          | 法           | 法           | 篇           | 茶          | 糖           | 醬          | 油          | 術          | 篇          |

全部拾貳卷 每月一回二十  
定價 壹冊(紙數三百頁)金拾五  
部拾貳冊前金壹圓六拾五錢●全  
二付六錢ソ、御注文前金ヲ要ス

45  
255





45  
255

013693-000-5

45-255

世界三大宗教

戸川 残花(安宅) / 著

M28

ABA-0164



